第４５回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催　水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援　文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構

「健全な水循環」
ロゴマーク

第４５回　全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和 52 年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である８月の初日を「水の日」（８月１日）とし、この日を初日とする一週間（８月１日～７日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和 54 年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成 26 年３月に水循環基本法が成立し、８月１日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から 8,779 編（学校数 278 校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文 40 編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝申し上げます。

令和５年９月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和 52 年５月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている８月の初日である８月１日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解

昭和52年５月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め 、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年８月１日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成 26 年３月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第 10 条において、「水の日」が８月１日と規定され、国及び地方公共団体は水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条　国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

２　水の日は、八月一日とする。

３　国及び地方公共団体は、水の日の趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞（一編）

《内閣総理大臣賞》 群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 三年 安藤 周平 1 わさびになりたい

優秀賞（十編）

《厚生労働大臣賞》 青森県 八戸市立是川中学校 二年 小林 千花 2 日本の水

《農林水産大臣賞》 宮城県 仙台市立郡山中学校 三年 辻井 珠希 3 大好きな景色と水

《経済産業大臣賞》 愛媛県 松山市立南第二中学校 三年 松平 定久 4 ダム湖に沈む村

《国土交通大臣賞》 沖縄県 南風原町立南風原中学校 三年 平田 菜乃華 5 水の重み

《環境大臣賞》 滋賀県 近江兄弟社中学校 一年 福岡 周 6 手紙　琵琶湖のあなたへ

《全日本中学校長会会長賞》 北海道 砂川市立砂川中学校 三年 水島 颯一 7 大切な遊水地と共に

《水の週間実行委員会会長賞》 静岡県 磐田市立磐田第一中学校 一年 佐藤 迪洋 8 感動のネットワーク水

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 埼玉県 川口市立高等学校附属中学校 二年 合葉 鴻太 9 「金賞の思いを捧げて」

《シャワーズ賞》 徳島県 神山町神山中学校 三年 中南 仁 10 うちの川

《中央審査会特別賞》 静岡県 常葉大学附属常葉中学校 一年 西ヶ谷 あかり 11 清らかな水、尊い水

入選（二十九編）

青森県 南部町立名川中学校 二年 松山 結宇 12
青森県 むつ市立関根中学校 三年 鳴海 綺音 13
福島県 須賀川市立第一中学校 三年 秋山 北透 14
茨城県 土浦日本大学中等教育学校 二年 遠藤 瑠七 15
栃木県 栃木県立矢板東高等学校附属中学校 三年 佐藤 姫香 16
群馬県 群馬大学共同教育学部附属中学校 二年 内田 崇法 17
東京都 聖園女学院女子中等科学習院女子中等科 三年 下野 理央 18
神奈川県 聖園女学院中学校 一年 植松 舞花 19
新潟県 新潟大学附属長岡中学校 三年 新保 心菜 20
富山県 黒部市立清明中学校 二年 近川 藍子 21
福井県 勝山市立勝山北部中学校 三年 廣田 真里菜 22
岐阜県 川辺町立川辺中学校 三年 木下 真心 23
愛知県 設楽町立津具中学校 二年 村松 真波 24
三重県 高田中学校 一年 山中 健資 25
京都府 京都先端科学大学附属中学校 一年 三ツ木 丈琉 26
大阪府 大阪府立水都国際中学校 一年 村井 椛恋 27
奈良県 奈良市立富雄第三中学校 三年 落合 一葵 28
和歌山県 開智中学校 一年 篠崎 唯奈 29
島根県 松江市立湖南中学校 三年 高草木 晴香 30
岡山県 岡山県立岡山操山中学校 二年 吉田 彩乃 31
香川県 坂出市立東部中学校 二年 山中 恋 32
愛媛県 新居浜市立南中学校 三年 篠原 咲音 33
佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校 三年 田口 夢彩 34
熊本県 真和中学校 三年 杉本 周優 35
大分県 大分市立大分西中学校 二年 池本 すみれ 36
宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 崎田 莉央 37
宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 一年 田邉 彩乃 38
中国 青島日本人学校 三年 塩沢 里菜 39
カンボジア プノンペン日本人学校 三年 福井 愛莉 40

資料

第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 41
第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 42
第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 43
第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 44
第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 45
第四十五回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 46

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

わさびになりたい

群馬県　群馬大学共同教育学部附属中学校　三年　安藤　周平

私は、寿司が大好物だ。寿司に欠かせないのが、ツーンと鼻に抜けるわさびの辛さだ。わさびは不思議に満ちた植物だ。私は、わさび好きが高じて、わさびを自分で育ててみようと考え、わさびの苗を買ったことがある。説明書の指示に従って水槽に水をはり、土を入れ、わさびを植えた。しかし、数日もすると葉が垂れ下がり、ついには枯れてしまった。その後も、水換えをしたり土の質を変えたりしながら、何度もわさびの水耕栽培にチャレンジしたが、最長でも二か月程度しかもたず、わさび栽培は失敗に終わった。

どうしてうまく育たないのか。調べた結果、溜まり水でわさびが育たないのは、わさびの根から、種子発芽や微生物の生育を阻害する物質が放出されているためだということが分かった。わさびが放出するアリルイソチオシアネートという物質は、あらゆる植物の成長を妨げる。他の植物だけでなく、なんとわさび自身をも枯らしてしまう。わさびは、自らが作り出す物質で、生命線である水を汚してしまう。いわば自滅する性質を持っているのだ。だからわさびは流水でないと育てるのが難しい。なんと不思議な植物だろう。わさびに対する私の関心はますます高まった。

わさびの成長する姿を見たくて、私は昨年の夏、久しぶりの外出先に長野県にあるわさび農場を選んだ。そこでは、見渡す限りの大きなわさび田に、数千株はあろうかというわさびが整然と植え付けられていた。わさび田には、隣を流れる清流から引き込んだ水が、わさびの間を縫うように流れていた。その水は宝石のように光りながら豊かに流れており、橋の上から見ても、水底の石の粒がはっきり見えるほど澄んでいた。足を浸してもよいコーナーがあったので、わさびになった気持ちで足を入れてみた。真夏の火照った身体が冷やされて気持ちいいと感じたのは最初だけで、一分もしないうちに冷たさで指先が痛くなり、足を抜いてしまった。これがわさびを育む水なのだと身をもって体験した。

なるほど、これだけ大量の美しい水が流れていれば、アリルイソチオシアネートもあっという間に押し流され、わさびを枯らすことはないだろう。しかし、流れた先には水田がある。下流で稲が育たなくなるなど水質汚染の問題が発生しないのはなぜだろうか。

この問題はすぐに解決した。アリルイソチオシアネートは比較的短時間で揮発してしまうのだ。わさびを食べたときのツーンとした感じが長く続かないのはそのためだ。わさびの毒素はすぐに揮発してなくなるから、下流の植物への影響はなく、水質汚染の問題は生じないのだ。

一方、私たち人間はどうだろう。これまでの歴史を振り返ると、産業発展のため、人間は様々な物質を作り出し、水を汚染した。河川に有毒物質が流入し、日本各地で公害が発生した。現在でも、原発の汚染水の問題を抱える。私たち人間は、自分で作り出したもので大切な水を汚している。生きている以上、周りの環境に影響を与えてしまうことは避けられない。だからこそ、汚してしまった「その後」まで考えることが不可欠だ。

私も、わさびのように生きられないか。私たちには、水資源を守り安全な水を次の世代に引き継ぐ責務がある。生きるために作り出してしまった有害物質を無害にして自然に戻すにはどうしたらよいか。困難な課題だが、私たちの世代がなんとしても解決しなければならない。新興国では経済発展とともに、環境汚染、水質汚染が叫ばれている。すでに公害を経験した歴史を持つからこそ、私たちが先頭に立ち水を守らなければならない。私はわさびになりたい。わさびのツーンとした辛みを感じながら、私はその決意を新たにした。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

日本の水

青森県　八戸市立是川中学校　二年　小林　千花

亡くなった私の祖父は「水をつくる人」だった。四十年以上もの間、市の浄水場やポンプ場で市民のための水を作り続け、みんなに届け続ける仕事をしていたそうだ。

私の知っている祖父はすでに退職し、優しく明るい、たくさん遊んでくれたおじいちゃんだった。そして私が四歳の時に亡くなったので、祖父の仕事についてはあまり詳しくはなかった。

母から私の知らなかった祖父の働いていた頃の話を聞いた。

水道の水は、二十四時間、すべての人に届けることが必要だ。そのため、祖父の勤務は日中働いた次の日は夜勤、夜勤から帰宅した次の日が休みという四日間のサイクルを繰り返していたそうだ。土日が休みではない日も多く、母は家族旅行などもほとんど連れて行ってもらったことがなかったそうだ。

水の作り方は、その日の川や湧き水のコンディションを確認するところから始めるそうだ。にごり方や雑菌の量、ＰＨなどを調べ、それに合わせ、薬品を加える。不純物を凝集剤で取り、ろ過し、塩素を加えて殺菌し、水道水を作る。

大雨や台風などのときは急激に水が濁るため、真夜中でも職場に駆けつけ、水作りを手伝わなければならないときもあったそうだ。

それから、季節や時間、使用量を調べながら、送水量を考えてそれぞれの地域に水道水を送っていたのだそうだ。

祖父は、「八戸の水は自分たちが守るんだ」と誇りをもって仕事をしていたそうだ。

八戸の水は「軟水」で、味がまろやかでおいしく、髪や肌がつるつるになる良い質の水でもあるそうだ。

塩素の匂いがする水が嫌いな人も多いが、匂いのない水は送水の末端の、殺菌力の低下した危険度が高い水だということも初めて知った。

水道の蛇口をひねると出てくる水は、かつて祖父が誇りを持って作り、今も誰かが私たちに届けようと、心を込めて作り、送ってきているものなのだと思う。

私にとって、水道水は少しだけ特別なものに感じられるようになった。

私たちは日常で沢山の安全な水を使用している。だが、世界には安全な水を飲めず、そもそも水を飲めないという人もたくさんいるのだ。二〇二〇年には安全な水を飲めない人が世界中に二十億人もいる。これは日本の人口の十六倍にもあたる。

日常で使用している水は、当たり前に安全だと信じているが、その安全は日本に豊富で良質な水があり、誰かが守って作ってくれたものなのだと知った。

水道から出る水がどこから来たのか、どうやって来たかを知ると、大変な手間がかかり、私たちに届いていることが分かる。そんな水を、これから大切に使っていきたい、未来の誰かが使えるものへと繋げていきたいと思う。

農林水産大臣賞（優秀賞）

大好きな景色と水

宮城県　仙台市立郡山中学校　三年　辻井　珠希

“水”と聞いてあなたは何を連想するだろう。どこまでも続く海の水、水道の蛇口から出る水、透き通った湖。世界には様々な“水”がある。そんな中、私が思い浮かべたのは、五月の見渡すかぎりに広がる水田だ。私の祖父母は農家。一面の田んぼは見慣れた景色で私はこの“田舎”と呼ばれる風景が大好きだ。田んぼは一年を通して様々な形状になる。稲作において水はとても重要。そのつながりを特に感じるのが五月に行われる田植え、そして水田だと私は思う。水田や水は稲作においてどんな役割をもっているのだろう。

まず、水田に張られた水には主に三つのはたらきがある。

一、稲を寒さから保護する。水には「熱しやすく、冷めにくい」という性質があり、気温が低くなっても水の中は温かい環境となる。稲は熱帯で生まれた作物なので、気温が低くなると冷害の被害を受けやすい。水が温度調節をしてくれることで稲を冷害から守れるのだ。

二、雑草、病害虫の発生を抑える。田んぼに水が溜まっていると、土の中は酸欠状態になる。この状態では多くの雑草の種子が呼吸できず、芽を出すことができなくなる。また作物に悪さをする病害虫も、水が張ってあると棲みづらい環境となるため数が少なくなる。

三、連作障害をなくす。同じ土地で同じ作物を毎年育てていると、病害虫などの被害を受け、収穫量が減ってしまうことがある。水を溜めることで、不足しがちな微量要素の補給ができたり、逆に過剰な成分は水が流し出してくれる。また、二つ目のはたらきで言ったように、病害虫の被害を防ぐこともできる。

このように、水田に張られた水には、多くのはたらきがある。水があることで安定して、おいしいお米を作ることができるのだ。そして水田にはお米をつくる以外にも隠しもった三つのすごいはたらきがあるのだ。

一、水のろ過。水田に入った水は、地下に浸透し、土の中のパイプのような水路を通る。この間に、ゴミなどは土の表面で、もっと細かい不純物は土の中で取り除かれてきれいな水になる。

二、洪水を防ぐ。水田の周りにはアゼという、水田と水田の間に土を盛り上げてつくった小さな堤があり、このアゼがあるために水が溜められる。アゼに囲まれた田は大雨のときに雨水をため、その後ゆっくり川に流す。田んぼは、ダムのようなはたらきもするのだ。

三、さまざまな命を育む。水田には、バッタ、トンボ、カエル、タニシ、メダカなど、多くの生き物がいる。堆肥などの有機物を分解する微生物が繁殖し、それを小魚が食べ、小魚を水鳥が食べる。クモや昆虫をカエルが食べ、そのカエルをヘビが食べ、そのヘビを猛きん類が食べる。この「食物連鎖」によって水田では多くの生き物がつながり合って生きている。

今回は水から一面に広がる水田を連想し、そこから水田に張られた水の役割や、水田の意外な一面などを知ることができた。普段見ていた水田の水にこんなにたくさんのはたらきがあることにすごく驚いた。水田にも、お米を育てるだけでなく、自然への貢献があると知り、多くの人が“田舎”と言っていやがる景色にこんなすごいはたらきがあることを知ってほしいと思った。水が透明なのは水を通して物事を見ることで沢山のことに気付くことができるからではないか。みんなにも普段近くにありすぎて意識しない水を通して物事を見てみてほしい。近くにありすぎて、当たり前、とさえ思わないものにも意識を向けて生活することで少しずつ社会は変わっていくのかなと、私は思った。

経済産業大臣賞（優秀賞）

ダム湖に沈む村

愛媛県　松山市立南第二中学校　三年　松平　定久

私の祖父が建てた旧伊予三島市の家は、銅山川のほとりにひっそりと建っている。そこは、奥の院泉龍寺を通り過ぎ、細い山道を進み、金砂湖を渡り、中の川へ入った所にある。家族と春休みに訪れた際、澄んだ青緑色の金砂湖を想像して望むと、今まで見た事のない水位で、底が干あがるほどとなっていた。建物や道路の基礎と思われる跡を見つけ、父がダム湖に水没した村の話をしてくれた事を思い出した。私は、この広大な自然にそびえ立つ銅山川３大ダムにより、どのような水資源開発が行われていたのか知りたいと思った。

銅山川疎水は、「四国三郎」と呼ばれる吉野川上流の銅山川からトンネルを貫き、四国中央市に農業用水を供給している。水源不足による度かさなる干ばつのため、流域変更による分水を求め、下流の徳島県との調整や、ダムにより水没する村との交渉など幾多の困難を乗り越え現在では、発電や工業、飲料水に利用され全国屈指の製紙産業や都市の発展を支えていることが分かった。そして、私が水切り石で遊ぶ銅山川は、雲母を含む石が多く、日光が当たると川がきらきらして見え、その用水は「黄金の水」とも言われ、金砂村には「史跡、砂金採取跡の碑」が建てられている。

私は、自分が今までまばゆい沿岸に建つ立派な煙突を見て、誇らしい気持ちを感じていたが、その発展する産業の陰には、水没する村があったと思うと切ない気持ちとなった。そして、その水資源の開発は、村を水没させるだけではなく小学校が廃校になるなど、村が過疎化するきっかけとなったと考えるようになった。また、平成の大合併で、山間部にある農山村主体の自治体が、平地部の都市と合併することで過疎化が進行するという、典型的な例も相まってへき地となったことが分かった。実際、雨戸の閉まった商店やブラックバスの船着き所を通る度に、祖母や父が昔利用した時の事を懐かしそうに話し、閉鎖して残念そうにしていた。また、日暮れ時には、民家の灯りを探し、村民の生活を感じると何処かほっとした感じであった。私は、過疎化が止められなくても、関わる人として、集落の生活やダム湖の水位を心配するなど、関心を持ち続ける事が大切であると思った。また、近年近隣の中学校ではその昔農閑期の副業として砂金採りが行われていたことなど、ふるさとの歴史を知り、触れ合うことを目的として、銅山川で砂金採り体験が行われている。私は、輝かしい産業だけに注目するのではなく、その産業の基礎を成した銅山川やダムについて学習し、当時の人が未来に架けた思いを理解する事が大事であると思った。

三島の家には、中の川温泉を引いており、祖母は訪れる度に入浴を楽しみにしている。川の水を引いていることもあり、水道代が無料の温泉である。しかし、川の恩恵には土や落ち葉が含まれ、水道管を詰まらせ、お風呂や台所での給水が困難な時もある。祖母は、自宅からペットボトルに飲料用水を何本も用意し、父は、寒い日も日暮れでも、文句を言うことなく、手慣れた感じで工具を持ち、外の水道管のゴミを取り除き、温かいお風呂を沸かしてくれる。私は、そんな家族の姿をみて、川の恩恵を受けるというのは、便利に改良するのではなく、川を理解し、手をかける事もいとわず、共生する姿勢が大切なのではないかと思った。

現在、銅山川３大ダムの貯水状況は平年を下回り、渇水対策が継続して行われている。瀬戸内海気候による降水の少なさは、今も変わらず人々を悩ませている。私達は、先人達が未来に託した思いを胸に、台風や気候に頼るだけではなく、水と共生する社会を私達の子孫のために次は自分達が考え続けなければならない。祖母がいつまでも温かいお風呂に入れるように銅山川と共生していきたい。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水の重み

沖縄県　南風原中学校　三年　　平田　菜乃華

水。「私にとって水とは何だろう?」そう自分に問いかけた。普段当たり前のようにある水。「蛇口をひねれば水」という言葉は誰もが耳にしたことがあるだろう。そのため、身近にある水に対して特別に思うことはなかった。

しかし、ある写真を目にしてから水に対しての思いが変わった。学校でＳＤＧｓの学習をしている際に見た写真だ。二～三歳の子が汚れたバケツに泥水を入れ、飲んでいる写真だった。異様な姿に驚いた。すごく悲しかった。「幼い頃からこの水を飲んでいるのか。」「いや、どんなに汚くてもこの水を飲むしかないのか。」心が痛んだ。この現状を変える方法はないのか、考えた。水をろ過すればきれいで安全な水が飲めるのではないかと思った。

そこで、私は「泥水を自作のろ過器を使い、安心安全な水にする」という自由研究をすることにした。浄水場のしくみを参考に、砂や石、綿などを入れ、ろ過装置を作り、土と水をまぜ、石や草、虫が入った泥水を流した。ろ過を三回くり返し、二時間ほどでコップ一杯分の水ができた。初めの泥水よりだいぶ透明になったが、まだ安心して飲める水にはほど遠かった。その後、水を煮沸し、殺菌し、残った水をどのくらい汚れているか、薬品を使い調べてみた。するとものすごく汚れていた。結果、安心安全な水は自作のろ過器ではつくれなかった。

その時私は、安心安全な水が毎日好きなだけ飲めることにとても感謝したいと思った。安心安全な水をつくることはとても大変だと実感した。浄水場で働いている方々に感謝の気持ちを伝えたいと強く思った。「どうしたら感謝の気持ちを伝えられるだろうか。」また、「私が感じた安心安全な水がすぐそこにあるありがたみは、どうやったら多くの人に伝わるのだろうか。」考えた末、水道コンクールのポスターを自分で描いて伝えようと思った。

水道局の人から話を聞いたり、本を読んだりして、自分の思いを伝える為に感謝の気持ちをこめた、ポスターを描いた。キャッチコピーは「命をつなぐ・水をつなぐ」浄水場で働いている方と、健康で元気な私達が水を飲んでいる絵を描いた。すると賞をもらい、様々なショッピングセンターでしばらく展示することになった。私のポスターを多くの人に見てもらうことができ、嬉しく、胸が熱くなった。私のポスターを通して、多くの人に安心安全な水は、浄水場の方々やダムの管理をしている方の苦労を経て、今の私達がいるということを考え直してほしいとあらためて思った。だから私は、来年も水道コンクールのポスターを描きたいと思った。

蛇口をひねれば透明な水。何の心配もいらない水。おいしい水。好きな時に好きなだけ飲める水。これは当たり前じゃない、ということをＳＤＧｓの授業で見た写真やろ過器を使った実体験を通して深く学んだ。「水を大切にしなさい。」「水に感謝。」「蛇口をひねれば水。」今ではこれら一つ一つの言葉に重みを感じる。私達の生活に水は欠かせない。全ての人が水と関わり生きていく。だからこそ、水のありがたみを知ってほしい。感じてほしい。私は、それを知って感じてもらうために、これからも自分にできることを探し、多くの人に伝えていきたい。

もう一度自分自身に問う。「私にとって水とは何だろう?」私はこう答える。「私にとって水とは日々感謝をする人生のパートナーだ。」

環境大臣賞（優秀賞）

手紙　琵琶湖のあなたへ

滋賀県　近江兄弟社中学校　一年　福岡　周

「私はあなたのことをよく考えもせず、食器洗いをした時、お皿に残ったマヨネーズをふき取らずに流してしまいました。いやな思いをさせてしまい、ごめんなさい。」

私が食器を洗っているのを見た母が「あぁ」と声を出したので顔を見ると、とても残念そうにしていました。何かが遅かったようでしたが、私には理由がわかりませんでした。母が「一緒においで」と庭の地面にある土がついた白いふたを開けて私にみせました。そこには白いかたまりがぼろぼろと浮いていて、泡とともに生臭いにおいがしました。思わず「くさい、気持ちが悪い」と私はふたをしめました。すぐに母が言った言葉は「ふたをしめてもその油は消えたことにならないよ」と。

それから日がたっても、なんとなく地面の下が気になっていました。学校へ行く途中もマンホールの下に流れていく水のこと、その行く末が心配になりました。

翌日図書館へ行き、水のことが書いてある本を探しました。特に滋賀県の下水がどこに行くのか知りたかったので、『琵琶湖のカルテ』（今関信子著）を司書の方に紹介してもらいました。琵琶湖の水質などを調査し科学者達がまるで医者のように琵琶湖の状態を心配していました。私はその本を一気に読みました。そこには、人間の活動環境の変化が琵琶湖の調子を崩していることが書かれていました。合成洗剤により赤潮が発生、魚が多く死に、その水で洗たくをした布おむつを赤ちゃんが使用したことで肌がかぶれたことなど、色々な影響が出たことを知りました。私は滋賀県に住みながらも、合成洗剤をせっけんに変える「せっけん運動」のことを知りませんでした。今まで身近なところを見ようとせずに、水をよごしていることに無関心だった私は自分をはずかしく思いました。

家で使用しているせんたく洗剤の袋にかかれている成分を調べてみました。そこには、「界面活性剤、蛍光増白剤」の言葉が見えました。そのことも本に書かれていました。実験をすると合成洗剤をまぜた水そうの中にアユを入れると死んでしまいました。水は透明できれいな水に見えたが、その蛍光増白剤は、洗たく物を輝くような白にします。その美しい白が、魚たちの命をおびやかしているのです。私はその悲しい実験の結果をみて、白い服が真っ白でなくてもいいのにと思いました。同時に私が着る制服の白いカッターシャツを思い出しました。

「琵琶湖の水をきれいにして魚たちが死なないように、私のシャツは真っ白でなくてもいい。」と、これから合成洗剤をせっけんにしていこうと家族で話をしました。いまからは琵琶湖のために行動していきたいと思います。そしてもう、マヨネーズを流してしまう私とはさよならします。この取り組みを新しい制服を着ている仲間にも広めていきたいです。きっと琵琶湖も生き物も喜んでくれるだろう。まずは私が今、自分にできることからはじめたい。

「琵琶湖のあなたへ、お久しぶりです。以前の私は、あなたはきれいな水で元気に過ごしていると思いこんでいました。人間と共に生きることに苦しんでいたのですね。私が小学五年生の時に行ったフローティングで船上からみたあなたは、緑っぽく顔色が悪くみえました。私は生活を振り返ってみました。毎日使って流していた水のよごれや、水の行方を今まで知ろうとしませんでした。私は今自分にできることをしています。小さな行動なので、大きなあなたには何も感じないかもしれませんが、これから続けて、その活動を広めていきたいと思います。あなたにこの先、私達人間と共に生きることを喜んでもらえるように。また会いに行きます。さようなら。」

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

大切な遊水地と共に

北海道　砂川市立砂川中学校　三年　　水島　颯一

私が住んでいる砂川市には、遊水地がある。私の家の近くにあり、子どもの頃から自転車で一周したり、釣りをしたりと親しんできた場所である。近くを流れる石狩川の氾濫を防ぐために造られたものだ。石狩川は、大雨により過去に何度も氾濫し、この砂川も被害を受けてきた。そのため、蛇行する川を工事で直線にし、残された蛇行跡を遊水地にしたのである。大雨で川の水量が増えると、一時的にこの遊水地に水を引き入れ、水量を減らして洪水を防ぐ役割を持っている。

川を管理している人々のこうした努力のおかげで、今では石狩川が氾濫して被害を受けるということはなくなった。そのためか、石狩川や遊水地について、私自身あまり関心を持っていなかった。小学校の学習で、石狩川の氾濫の歴史や遊水地の役割などを学習したが、それきり考えることもなかった。だが、中学校でＳＤＧｓを学習する中、水を大切にすることが目標の一つに掲げられていることを知った。その根拠となるようなアフリカの子どもたちが泥水を飲んでいる映像、干ばつによる水不足の実態をテレビで観ているうちに、このままでいいのだろうかと、改めて水について考えるようになった。

水は、私たちの命や暮らしを支える大切なものであり、みんなの手で守るべきものなのだと強く感じた。

私たち日本人にしても、水道の無駄使いに始まり、下水道や河川の汚染、水不足など、深刻な水問題を抱えていることもわかった。水の管理はその専門家に任せておけばよい、自分一人くらい水をどう使おうが関係ない、という意識ならば、すぐに改めるべきだ。いつ水が使えなくなってもおかしくない危機が迫っているからだ。水が使えなくなれば、命にかかわる。だから、他人任せではなく、水を使う私たちこそが、共に水を守っていかなければならないのだ。私も、まず家で水道の節水や油を流さないことを確実に行うことにした。

遊水地に関わっても、その役割を理解し直すことができた。ただの水辺ではなく川の氾濫から私たちを守る大切な存在なのだ。この遊水地には、砂川に暮らしてきた人たちや石狩川を管理する人たちの苦労の歴史が刻まれている。遊水地ができた背景にある、人の思いや歴史を私たちが受け継ぎ、この遊水地をこれからも大切にしていこうと思う。

遊水地は、私たちの暮らしを豊かにする役割も持っている。以前、遊水地の周りに桜の苗木を植えたことや、周りのゴミ拾いに参加したことがあった。当時は活動の目的など考えたこともなかったが、それは水辺の環境を整え、美しい景観にしていく活動だったのだ。水が、私たちの暮らしに豊かさをもたらすのだ。

今、遊水地は、「砂川オアシスパーク」として、夏はカヌーやヨット、冬はワカサギ釣りなどが楽しめる私たちの憩いの場となっている。水辺を彩る四季折々の景色は素晴らしい。桜の花に囲まれた水辺や、夕陽の中を渡り鳥が飛んでいく風景に心を奪われる。

水という存在が、私たちの命を育み、暮らしをより豊かなものにしてくれる。水の恩恵に感謝したい。だからこそ、水を大切にしながら水を守っていくこと、これが今の私たちに必要なことなのである。

先日も久しぶりに遊水地を訪れた。桜もそろそろ咲きそうである。帰る前に、落ちていたゴミを拾ってから帰った。自分が遊水地に植えた桜が、大きくなって水辺を彩っていく姿を、これからもずっと眺めていきたい。

この遊水地の環境を守る一人として、大切な水を守る一人として、これからもゴミ拾いなど小さなことから取り組んでいこうと思っている。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

感動のネットワーク水

静岡県　磐田市立磐田第一中学校　一年　佐藤　迪洋

落雷で断水になってしまった。水が飲めない、手が洗えない、トイレが使えない・・・どうしよう。この時母はおちついて言った。「備ちく水があるから、コップに必要量とって使ってね。手を洗う位ならおフロの水で十分よ。」おかげで断水の間、ほとんど迷わなかった。

備える事ができていたのは、十二年前の経験からだと母は言う。東日本大しん災がおきた時、ぼくは関東にいた。まだ０歳だったぼくを育てるために、水は必須。飲み水は勿論、オムツかえ、おフロ、り乳食の調理、その食器もベビー服も授乳用品もきれいに洗って、衛生を保たねばならない。赤ちゃんを育てるためには想像以上に水が必要になってくる。今なら多少汚い手でもがまんできたり、なるべく水分せっ取をひかえようと思えるが、赤ちゃんは直接命に関わってくる。さらに赤ちゃんを育てる人の手も衛生を保つため洗わなくてはならないし、母乳を出すためには水分せっ取も必要になってくる。水がない中の育児で、母は本当に大変な思いをしたそうだ。

水道が使えるようになっても、問題は続いた。水道水から基準値をこえる放射性物質が検出されたという事で、乳児は水道水のせっ取をひかえるよう呼びかけられた。多少買いおきしていた水は、ぼくの世話ですぐ無くなってしまったという。母は地元の店を全て回ったが、水売り場は全て空。ネットで水を探しても、売り切れだったそうだ。やっと通販で見つけたフランスの水を購入できたというが、やっと届いた水も、硬水だったので、乳児のじんぞうに負担をかけてしまう。結局ぼくには使えなかったそうだ。今あたり前に水道から出てくる水は、軟水だし、安心・安全、蛇口をひねればすぐに飲めるし使えるという、奇跡のような素晴しい環境なのだと分かった。

社会科で行政について学習したのを機に、しん災の際、行政は水に関してどんな取り組みをしたか調べてみた。例えば、厚生労働省はひ災して間もない水道水がより安全に使えるよう、各都道府県に活性炭を活用する提案などをしてくれていた。農林水産省は、大量の水が必要となる農業水利施設の用水路などを復旧してくれた。国土交通省は飲料水提供や給水車のルート確保。給水車の燃料供給は経済産業省がしてくれた。水資源機構は漏水箇所の応急復旧や、水道用水・工業用水・農業用水の取水・通水までわずか七日で完了してくれていた。文部科学省は蛇口水を一年以上も毎日測定し続け、放射性物質が基準値以下かどうか測定してくれている。環境省は、公共用水域と地下水のモニタリングを続けてくれている。他にも全ての府省庁が、協力し、尽力してくれていた事が分かった。ぼくたちに水を届けるため、これ程のネットワークが働いていた事に、ぼくは涙が出る程感動した。

調べていて、おどろいた事がある。それは水資源機構の可はん式海水淡水化装置だ。ため池の水を水道水質基準適合レベルまでじょう化し、断水地域に供給してくれていたのだ。地球上の水の九十七％は海水だし、川やため池の水を飲める水にできる装置は、災害時に関わらず今後ますます必要になると思う。この技術に感動したぼくは、ペットボトルでろ過器を作った。静岡県で配布してくれている防災マニュアルや本、ネットで調べ、試行さく誤して作成した。最初はなかなかにごりが取れなかったが、フィルターを色々な素材に変える事できれいになる事、び生物が水のじょう化に有効な事など、色々な事が分かってきた。いつも雨水をためて畑にまいたりスコップを洗うのに使ってきたが、これからはろ過水で手を洗う事に決めた。ろ過装置は災害時だけでなく、水不足などあらゆるきん急時に活やくすると思う。ぼくのろ過器はまだ手洗い位にしか使えていないが、安心して飲める位になるまで研究と改良を続けていきたい。たくさんの人に安全でおいしい水を届けるために。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「金賞の思いを捧げて」

埼玉県　川口市立高等学校附属中学校　二年　合葉　鴻太

「井澤弥惣兵衛ってすごいなあ！」

小学四年生のころ、僕はこの人物のとりこになった。井澤弥惣兵衛というのは江戸時代に活躍した紀州出身の役人だ。彼は、その優れた技術を用いて利根川から約六十キロにも渡って見沼代用水を引き、水害や水不足で困っていた人々を救った英雄だ。そんなことを教科書の「かわぐち」で学んでから、どんな戦国大名や偉人達とも比べられないくらい井澤弥惣兵衛のことが好きになった。

僕の住んでいる埼玉県には、川がたくさん流れている。荒川や芝川、利根川に江戸川…。有名な川の数々は埼玉県にある。しかし、水には水害もつきものだ。その年の大きな台風で芝川は氾濫寸前まで増水していたし、荒川も氾濫してしまった。だからこそ、埼玉県では古くから治水の試みがなされてきた。利根川と荒川を切り離した、伊奈忠治をはじめとする伊奈氏や、見沼代用水を引いた井澤弥惣兵衛は埼玉の有名人だろう。彼らが作り上げた治水の遺産は今でも人々を助け、僕らの暮らしを支えてくれている。

なのに、今の見沼代用水や荒川は大切にされていない。もちろん、大切にしている人々がいないという訳ではない。それでも、川を我が物顔で汚す人がいるのだ。橋に置かれたビールの空き缶。平然とごみ入りのビニール袋を捨てる人。ヘドロまみれのタイヤを捨てる人。火のついた煙草を面白そうに投げ込む人。川をごみ箱のように扱う人がいる。そんな光景を見るたびにこう考えてきた。

「ここは、あなたの川じゃない。ごみ箱じゃない。みんなのためにここを築き上げてくれた人がいる。大切にそれを守ってきた人がいる。」

そんなことを心から知ってほしい、と僕は熱望した。

そこで、彼らのことを人々に広めようと、理解してもらおうと、「かわぐち社会科マップコンテスト」への参加を決めた。

彼らのことを調べる過程で沢山の人々に話を聞いたり、色んな場所を見て回ってみたりした。かつての見沼溜井、芝川第一調節池、さいたま市立博物館。そこにいた、自身の体験を懸命に話してくれた人、当時の記録や状況を解説してくれた博物館のインストラクターさん。

全員が埼玉の川と、人々に尽くした彼らを敬愛していた。それらを通じて「井澤弥惣兵衛」や「伊奈忠治」のすごさを改めて実感した。だからこそ、今、汚されてしまった見沼代用水や荒川を思い浮かべると自分の無力さにますます腹が立つ。

「もっと川を、彼らの思いを大切にしてほしい！僕も地図に彼らの思いや功績を表したい！」という一心で作業に打ち込んだ。

治水を成功させたかつての技術、彼らの努力、情熱。そんなものを教科書以上に学ぶことができた。

でも、これで終わりではない。埼玉だけでなく日本全国に川や池、海があって、そこに情熱を捧げた人々がいる。それらを必死で守ってきた人がいる。そのことを自覚し、責任をもってそれらを「使わせてもらう」ことが、これからの僕たちには必要なのだ。

僕のマップは金賞を取った。あなたの思いは、行動は彼らに果たしてどう評価されるだろうか。彼らは僕らのそばに、水のそばにいる。水を使う度に「ありがとう。」そう思えば、僕たちの川は、池は、海はきっと美しくなっていくはずだ。

シャワーズ賞（優秀賞）

うちの川

徳島県　神山町神山中学校　三年　中南　仁

ぼくは毎年、家のそばを流れる川で泳ぐのを楽しみにしている。部活動で汗をかいた後、つめたく透き通った川にとびこみ、リフレッシュすることがたまらなく好きだ。自分にとってきれいな川の水は小さいころから身近なものであり、あたりまえのものであった。

しかし、その水があたりまえのことでないことをぼくはコマーシャルで知った。世界には水が簡単に手に入らなかったり、せっかく手に入れても汚染されていたりするらしい。水道をひねればきれいな水が出てくることはあたりまえでないことに驚いた。

ぼくが住む神山町の山の川は清流と呼ばれ普段はおだやかで美しいが、ひとたび大雨が降ると突然水量が増え、茶色くにごった濁流へと姿を変える。その流れは山地の土砂災害や、下流の浸水被害をまねくこともある。一方、神山町には上水道の設備がなく山水を使って生活している人もたくさんいると聞く。その人たちにとっては、雨が降らないと生活に不便をきたすこととなる。つまり、山の水、川の水は多すぎても少なすぎてもいけないということだ。

近ごろ、「山に保水力がなくなった」という話を聞くことがある。山が水をキープしておく力がなくなったため、洪水や渇水など極端な状態が増えて、ちょうどよい状態を保つことができなくなっているらしい。それはなぜか。ぼくはそれについて調べてみることにした。インターネットや町の広報誌などからは、山の保水力には、そこに植えられている樹種が深く関わっていると知った。そこで行政は、管理されていない山の境を明らかにし、行政に譲渡し、行政が管理していくという「森林境界明確化事業」を行っているということを知った。また、山に生えている針葉樹をすべて切りたおし、かわりに広葉樹を植えるという「樹種転換」を行っているということも知った。下級生や弟たちが、山に広葉樹の苗を植えに行ったことも、その一環らしい。なぜ、針葉樹のかわりに広葉樹を植えるのか。ぼくはそう考えたとき以前祖父から聞いた話を思い出した。祖父が子どものころの鮎喰川は今よりもはるかに水量が多かったそうだ。上流の地域で切りたおした木材でいかだを組み、それに乗って下流の徳島市まで木材を運ぶ「いかだ流し」が行われており、下流域まで途切れることなく水量が豊富だった。しかし今の鮎喰川を見るところどころで川の水が途切れ、河床がむき出しになっており、いかだを流していたことなど想像もできない。そうなってしまった原因の一つは、この数十年で山に針葉樹が増えすぎたことであるらしい。昔の人が財産区で植えた杉やひのきが管理されず野放しにされており、それらの木々が雨水を大量にすい上げるため、川の水が少なくなってしまったそうだ。町が行っている「樹種転換」が山をもとの姿にもどすための取り組みであり、それが鮎喰川をもとの姿にもどすことにつながるということを知った。

このように水を美しく豊かに保つためには、山を整備することが大切だ。山間部に住むぼくたちが山のためにできることを考え行動することは、ぼくたちが水の恵みをいつまでも受けつづけるために必要なことであるということを実感した。ぼくは、これからも山の植林活動や清掃活動などに積極的に参加し、神山の美しい自然を守っていくための取り組みをつづけていこうと思う。

最初に述べたようにぼくは家のそばを流れる川を「うちの川」と呼び、四季折々のうつろいを楽しみにしている。特に夏の暑い日にキンキンにひえて透き通った水にもぐることを毎年楽しみにしている。自分の子どもたちにもこの「うちの川」を残し、大切に受け継いでほしいと思っている。

中央審査会特別賞（優秀賞）

清らかな水、尊い水

静岡県　常葉大学附属常葉中学校　一年　西ヶ谷　あかり

私の住む、静岡市清水区には、興津川という清流が流れています。毎年鮎釣りの季節になると、釣り人だけでなく、釣り人の姿を見るために、川沿いの遊歩道には人が集まります。鮎はきれいな川でしか育つことができないため、まさに清流の象徴で、興津川は私の住む町の自慢の一つです。

しかし、昨年九月、静岡県を台風十五号がおそいました。夜遅くから降り続く強い雨は、やむことなく警報が何度も繰り返されました。眠れない夜が明け、外を少し歩くと、町中に大きな被害がもたらされていました。曾祖父母のお墓の裏山が崩れ落ちている。冠水した道路、どこからか流れてきた大きなごみが散乱している。動けなくなった車には、くっきりと茶色い泥がついていて、信じられない高さまで水があがってきていたのだということがわかりました。また興津川も美しかった姿は消え、茶色い水が勢いよく流れる恐ろしい姿になっていました。遊歩道は流れ着いた土砂と大木が押し寄せ、フェンスが曲がってしまっていました。

断水になることを知らせる広報静岡が流れるとまもなく、蛇口から水が出なくなってしまいました。興津川の取水口に土砂が流れ込み、取水できなくなってしまったのです。そして、道路が寸断され、土砂が家を飲み込んだ地域、家や生活に必要な物を失った方がたくさんいることが次々とわかり、これはただごとではない、と不安になりました。

ＪＲは運休、車は通行止めとなり、私たちの周りのスーパー、コンビニから一瞬で水がなくなりました。汗をかいてもお風呂にも入ることができません。トイレの水を流すこともできませんでした。

一晩経ち給水車が来てくれることになりました、という連絡を当時組合の班長だった母が家々に走って知らせていました。しかし、給水を待つ列は、四時間待ちです。こんなに水を手に入れることが難しいなんて。今まで当たり前のように蛇口から出てきた水がこんなに貴重なものだなんて、気づきもしませんでした。不安は募るばかりです。

そんな中、「井戸水あります。使ってください。」段ボールに書かれた手作りの看板が、あちらこちらに出始めました。また、両親のところには、「大丈夫。水送るよ。」や「今からお水届けに行くからね。」と遠いところから、ニュースを知り、荷物を送ってくれる人、車で届けてくれる人の存在がいました。看板を見るたびに、母が「ありがたいね。」と話をするたびに、私の周りのあたたかさを感じ、勇気が出ました。また、給水車は日に日に台数が増え、全国から来てくださる給水車の多さに、不安だった水の存在は、感謝の水に変わりました。

驚いたのは、母が「まだ私たちより困っている人がいるから。」と届けてもらったお水を、重い水を運べずに困っている人のところに運んでいったことです。「何かできることはあるかな。」自分たちもたくさん助けてもらいました。その感謝の水は、気持ちをのせて、めぐる水になりました。

久しぶりに蛇口から水が出た日、トイレの水を流すことができた日。水ってこんなに勢いよく流れていたのだ。慌てて蛇口をしめました。

しばらくは茶色く濁ったままの興津川がやっと元の美しい川の色に戻りました。こんなに美しい川の様子も今までとは少し違います。むき出しの斜面がそのままの状態のか所もいくつもあります。流木や土砂が流れ着いたままの場所もあります。それを見るたびに、あの日を思い出します。いつまでもこの清らかな水を守れるように自然を大切にしたいです。そして、尊い水の存在と、この経験を無駄にしないように生活していきたいと思います。

入選

水の未来を考える

青森県　南部町立名川中学校　二年　松山　結宇

私の住む南部町には、一級河川の馬淵川が流れている。広い川幅。その時々で変わる水量。日によって違う表情が見える。近くを通ると今日はどんな感じかな、とついつい見てしまう。

小学四年生のとき、夏休みの自由研究のために、家族で岩手県にある馬淵川の源流を見に行った。源流は、ちょろちょろと流れる湧き水のようなもので、源流といつも見ている馬淵川とは、まるで違うもののように思えた。いくつもの支流が合流し、雨水とともに水の量が増えていく。川は海に流れ込み、やがて蒸発し、雲になり、雨としてまた川に戻ってくることになるのだろう。水の循環は壮大で、それを想像すると何だか不思議な気持ちになる。

馬淵川は周辺の広い地域の水源として生活の支えになっている。そのおかげで、水の不足を感じることはない。しかし、世界では、水道水をそのまま飲める国は日本を含め、世界にある百九十か国以上の国のうち九から十三か国ほどしかなく、世界の水不足や衛生問題は深刻だ。ＳＤＧｓでは、「安全な水とトイレを世界中に」という目標が掲げられ、全ての人が衛生的な飲み水やトイレ環境のもとで生活できるようになることを目指して取組がされている。私の当たり前の生活は世界の当たり前ではないのだ。

このような中、私の住む南部町内で世界の水問題に向けて様々な取組をしている人たちがいる。青森県立名久井農業高等学校の研究チームだ。名久井農業高等学校の研究チームは、水のノーベル賞のジュニア版ともいわれる「ストックホルム青少年水大賞二〇二〇」でグランプリを受賞している。日本古来の土壌固化技術「三和土」を用いて、西アフリカの乾燥地での集水方法である「ザイ」の水を受け止めるための壁を強化し、土壌流出を防ぐ技術の開発などについて発表したそうだ。「三和土」で作った「ザイ」は、十三週間放置しても崩れないという。この水を収集するシステムは、乾燥によって作物の育てにくさに苦しんでいる地域の食料生産量の改善につながる提案だ。さらに、簡易堤防の開発も行っているそうで、新たなものへの発展をしながら研究が先輩から後輩へと引き継がれている。実際、グランプリ受賞後も「二〇二二日本ストックホルム青少年水大賞」で「土壌水分と転炉スラグで塩類集積を抑制するシステムの開発」をテーマに研究したものが大賞を受賞している。地元にある身近な高校から、世界につながる発信が継続してなされていることを誇らしく思う。

自分ではない誰かのためを思って行動を起こし、粘り強く取り組むことは、とても素晴らしいと思う。これは、ＳＤＧｓの根本とも共通しているのではないだろうか。世界のどこかで起きている水問題をみんなで考えていくことはきっと大きな力になる。

私も、水問題で困っている世界の人々の笑顔が見たい。そのために私に必要なのは、視野を広げ、想像力をふくらませることだと思う。蛇口を捻れば当然のように「おいしい」と思える水が飲める一方で、簡単に衛生的な水が手に入らない状況に置かれている人のことを想像してみる。私にできることは何だろう。水を大切に使うことだろうか。それとも必要以上に水を汚さないことだろうか。馬淵川の水が汚染され、生活用水として使用できないような未来には絶対にしたくない。自分の行動が世界や未来の水問題につながることを忘れないで生活していこうと思う。

国境を越えて優しさでつながり合い、水問題を協力して解決できる未来を、私たちの手で創っていきたい。

入選

水に惹かれる心

青森県　むつ市立関根中学校　三年　鳴海　綺音

水のイメージは?と問われたなら、とても自由なものだと私は答えます。水は固体にも気体にも形を変えられます。雲にもなれます。そして、空へすら行くことができる元来、自由な存在です。

器や環境、名前すらも変化させて水は世界を巡っています。そんな水の自由さに心惹かれた先人はこれまでにもたくさんいたのではないでしょうか。私はそう思います。

例をあげます。皆さんは「流水文」をご存じでしょうか。川や池の水を意匠化し、平行線の端をSの字でつないだ文様です。この流水文は弥生時代の銅鐸にもみられている文様です。つまり水は弥生時代にはもうすでに人間にインスピレーションを与えていたということです。

しかし、自由に変化し、様々な姿形を見せる水が人間に与えたインスピレーションを形にしたのはこれだけではありませんでした。渦を巻く水を描いた観世水文、寄せては返す波の姿を瞬間的にとらえ、意匠化した波文様。他にも水はその流れの速さや、水量などで見ることのできる表情や受ける印象が全く異なるので、荒磯波、さざ波など、水に関連する文様は数多く存在します。これらのことからも水が日本の文化に深く関わっているということがよくわかります。

水の見せる表情を描いているのは文様だけに限りません。文学作品の中にも重要な役目を果たし、それが描かれています。その典型として登場人物の心理を表す情景描写や背景など様々な場面で水は活躍しています。

とりわけ有名なものとしては、江戸時代に俳諧師として活躍した松尾芭蕉の代表句「古池や蛙飛び込む水の音」があげられます。この俳句で水と関連している語句は「古池」と「水の音」です。「古池」という一つのワードだけで閑散としひなびた池を連想することができます。それに「水の音」が加わることで、蛙が飛び込んだ音の余韻を感じます。このように、水の表現の仕方一つで連想させるものが大きく異なってくるのです。

ひとえに水と言っても荒々しい波の水と凪いだ湖の水では受ける印象が全く違います。前者は怒りや激しい感情を、後者は静かで穏やかな印象をだれもが受けるに違いありません。

日本は水に囲まれた島国ゆえに豊かな水とは切っても切れない関係がどうやら昔からあったようです。もともと日本では水を神聖なものとして扱ってきました。そして、その風習は現代の日本各地に今も根付いています。滝に打たれたり冷水を浴びることで身体のけがれを除去し、清浄にする滝行、神社を参拝する際に行う手水など神聖な場所の多くで水は重要な役目を果たしています。また、産湯や末期の水、若水など水は日本人の生命観にも大きく関わっているのは明らかです。

水はけがれのない、自由であるべき存在だと今も私は思います。その自由な姿がかつて文様として描かれ、人の感情を現し、日本人の考え方に多大な影響を及ぼしました。

しかし、その水が今危機に陥っています。産業排水や生活排水によって汚染され、本来の美しさや自由さが失われつつあります。日本人が愛し、心惹かれてきた水の美しさを、自由さを現世で失ってもいいのでしょうか。日本の文化を発展させた水の本来の姿をここで途絶えさせてもいいのでしょうか。

今こそ私達一人一人が水を守るために取り組むべきことがたくさんあるはずです。自由な水を守りたい。先人達が水に惹かれた心を保ちたい。魅力を失った水には価値のあるインスピレーションはみじんも生まれないはずです。

入選

限りある水について考える

福島県　須賀川市立第一中学校　三年　秋山　北透

心に残っているＣＭがある。いつも、友達とラグビーをして遊んでいた少年が、母の具合が悪くなったことで、代わりに毎日水汲みをしなければならなくなった。ある日、少年が井戸へ行くと、事情を知った友達らが、水瓶をもって笑顔で待っていた。このことを経験した少年は、のちに水道整備の仕事をするようになった、というストーリーだ。子供たちが毎日重い水瓶を持って長い道のりを歩く。これは、今もどこかの国では日常の風景になっている。

人はさまざまな用途に水を使う。飲料水のほか、掃除や洗濯、入浴などの生活用水、農作物を育てるための農業用水など、人の暮らしに水は不可欠である。水道の蛇口をひねるときれいな水が出る、というのは日本では当たり前のことだが、他国からの視点で考えるとそれは衝撃の出来事なのである。僕は、インターネットできれいな水を使える国について調べたことがある。ほとんどの国がきれいな水を使えると思っていたが、きれいな水が使える国は予想よりずっと少ないことを知った。日本のように水を贅沢に使える国もあれば、井戸や水道がなく、日々大変な思いをしている国もある。この二つができてしまっている状況は決して良くない。安全な水は世界中に平等に届くべきだと思った。

日本でも、水をひくために大変な努力をしている。僕は以前、学校の総合学習で「安積疎水」について学習した。明治時代、水不足に悩まされていた安積地方（現郡山市）。そして、そのことについて困っていた人達は、遠くはなれた猪苗代湖から水をひこうと考えたのだ。この考えが明治政府に伝わり、大久保利通や小林久敬、ファン・ドールンを中心に工事が行われた。そして三年かけて安積疎水が完成する。これにより、安積地方の人々の生活は豊かになった。今の当たり前の生活は、昔の人達の努力の上に成り立っている。

僕は、水で苦労した記憶がない。水道の蛇口をひねれば安全な水が出る。もし手元に水がなかったとしても、店や自動販売機で簡単に水が手に入る。さらに、夏にはプールで泳ぐなど、水を娯楽に使うこともある。娯楽に関しては、罪悪感なく水を大量に使っている。しかし、日々水で大変な思いをしている人達のことを考えると、申し訳なく思う。彼らにとっては、生きるための水なのだ。

一方で、僕たちは災害に見舞われることがある。それによって、断水などが生じ、水が使えなくなることがある。日本は、災害が起きた場合、国や市町村から支援を受けることができる。僕がまだ二歳のとき、東日本大震災があった。僕の家も水道が出なくなったが、幸い井戸水があったおかげで、トイレや風呂は使うことができた。しかし、井戸水は濁ってしまい、さらには放射能の問題もあったので、飲み水についての心配が大きかったそうだ。災害時は、日本の水も安全とは言えなくなる。自衛隊の給水車に並んで水を受け取る人達の映像を見たり、家族から当時の話を聞いたりして、水が使えなくなったときの大変さを知ることができた。災害時にどれだけ水が貴重か考えると、やはり、普段から水を大切にしなければならない。

日本には、安全な水を届けられる技術がある。だからこそ、それを世界中に広めてほしい。同時に、日本は水を大切にする先進国であってほしい。日本に優れた技術があるならば、節水にもその技術を生かせるはずだ。例えば節水タイプのシャワーヘッドや、水の量を調節できるトイレのレバーなどがある。センサーで水を出すのも、節水には効果的だ。そういった小さな試みの積み重ねが、水が豊富な日本でも、水を大切にする気持ちを育みＳＤＧｓにもつながっていくのだと思う。世界中どの国でも、すべての人が安全な水を大切に使えるようになってほしい。

入選

祖父のマンションと水

茨城県　土浦日本大学中等教育学校　二年　遠藤　瑠七

わたしの祖父は大手精密機械会社での技術職を退職した後、山梨県山中湖村に小さな中古マンションを購入した。長年様々なカメラの開発業務に従事してきた祖父だが、定年を機会に元々カメラが好きで会社に就職したことを思い出し、大好きな富士山を一年中好きなタイミングに撮れるように、そのマンションを手に入れたらしい。その縁もあり、わたしは両親や妹と共にその富士山麓にある住まいを何度か訪れた。窓から見える山中湖の静かな水面に映る富士山は、時間と共に色を変えていく。その光景は、今も強く残っている。

東京の中心部で生まれ育った私にとって、山中湖での生活は様々な驚きの連続だった。第一に、何といっても水道から出てくる水の冷たさと美味しさだ。真夏でも水道から出てくる水が冷たいのだ。東京の水も十二分に美味しいのだが、そこで喉を通す水はまた違った味を持っていた。なぜこんなに水が美味しいのかを知ろうと考え、村役場の水道課のホームページで確認した。そこには山中湖村の水道は全て地下水を使用していると書いてあった。富士山やその他近隣を囲む産地の土砂を経由し濾過され、豊富なミネラルを含むその水はいつも飲む水とは違う成分を含んでいるのが水にコクがある理由らしい。冷たい地下水で締められたうどんや、無添加にも関わらず、これでもかという程柔らかいパンのどちらもコクが感じられた。それぞれのお店に聞いたところ、おいしさの秘訣は、やはり水にあるとのお話だった。水とそれを取りかこむ山々による水源かん養は、その土地の名産物を生み出す大きな要素でもあったのだ。水自体が地域経済、ひいては社会生活にまで影響を与えるものと考えたことはなく、驚くと同時に、水の存在の大きさを感じたことを覚えている。私達は水に生かされているのだ。

一方で、祖父のマンションでの水の想い出は楽しいものばかりではなかった。特に冬期の水に関する思い出は辛いものであった。まず、冬にはマイナス２０度を下回ることもあることから、たまにしかマンションを訪問しない我々家族は冬になると水道を落とす必要があった。訪問の都度、水道を再開するのは手間がかかることから、マンションに行くときは常にペットボトルの水を購入し、持って行った。お風呂も家で入ることは出来ないことから、近隣の村営温泉施設まで出かけて行った。トイレは都度マンションの共有トイレまで走って行った。こういった山中湖での冬の生活は非常に大変な部分もあったが、私達の日頃の生活の一つ一つにおいて、水がどれほど重要でなくてはならないものかを痛感させられた。

山中湖村での楽しい経験も、大変な記憶も、全てわたしにとっては大切な思い出だ。そしてその横にはいつも美しくて十分な水があった。世界にはその日その日の飲み水を手に入れるのも大変な国がある中、日本では必要な時にいつでも水を手に入れることが出来る。わたしが住んできた東京や千葉での水は、全て山中湖のような水源地域の人々のお陰といえる。その恩恵を受けている都会で生活する私達は、その水源が今後も持続出来るように行動を起こす義務があると思う。例えば、ふるさと納税のように、自分の居住地でお世話になっている水源地域の自治体に、感謝の意味を込めて個人が寄付を出来るような仕組みがあってもいいのではと思う。全国の小中学校で、水源地のダムの見学をすることも、水源の大切さを楽しい体験として理解する上で非常に有効なのではと考える。私自身は、まずこの夏久しぶりに思い出の地、山中湖を家族で訪れ、水道から出る水をコップで思いっきり飲み干したいと思う。

入選

人間の Well-being「水」

栃木県　栃木県立矢板東高等学校附属中学校　三年　佐藤　姫香

人間が生きていく上で、「水」は欠くことの出来ないものである。水でできている海は、地球の面積の約七割を占めていて、あらゆる命の源とされる。地球上の水は海から蒸発した水が雲になり、雲の一部が雨や雪となり地上に降り、陸地にしみ込んで地下水や川となり、再び海に戻るという循環を繰り返している。このようにして、私達の生活している環境は長い期間を経て、作られてきた。

しかし、人間は水や自然が無限であると思い込み、いつしか人間のためだけに海を埋め立てたり、森林を伐採したり、生産によって二酸化炭素を発生させたりしている。このように人間は、地球の自然に過剰に手を加えてしまったのではないかと思う。その結果、地球温暖化を引き起こし、大雨や台風といった異常気象が頻発し、世界各国で大規模な気象災害が発生してしまっている。洪水被害、干ばつ被害、どちらも水の被害である。

日本に生まれ、日常生活を送る中で水に困ったことはあるだろうか。水が使えないとなったその時に初めて水の大切さ・ありがたみを実感する。工事のための断水でさえ、必要な水の確保と普段のように何も気にせず水を使うことができないといった不安で動揺したことを覚えている。その時は、トイレの水を溜めたり、飲み水を冷蔵庫に用意したりした。時計を何度も見て時間の過ぎるのを待った。そして、夕方には復旧し、いつも通り入浴や洗面ができた。「短時間でも普段通りに水が使えないというのは、なんて不便なんだ。」と心から思った。予告される断水でこのような状態なのに、災害時には予想以上に困惑してしまうだろう。

近年、世界で誰も取り残さないための目標、ＳＤＧＳ（持続可能な開発のための十七の国際目標）が掲げられた。この中にも、水に関する事項が挙げられている。「安全な水とトイレを世界中に」や「海の豊かさを守ろう」等である。

全ての人が品質管理された安全な水と衛生的な環境を利用できるようにし、限りある水資源を将来に渡って使い続けることができるような取り組みをすすめるとある。

調べを進めていくと、「節水」も重要だが、「森を守ること」も重要だと分かった。ただ木をたくさん植えるのではなく、間伐や枝打ちをして日光が下草に届き豊かな大地をつくることが重要になる。人間の手で伐採したのなら人間の手で植え、管理し、育て、生態系を守る環境保全をしなければならない。そうしなければ、ますます自然災害は起こりうるばかりだと思う。自然災害はもしかしたら、過去から現在において積み重なってできた人工災害であり、ある意味、自業自得ではないかとさえ考えてしまう。

これからの私たちは未来のために何をしなければいけないのか。一人一人、何を念頭におくべきなのか。日本政府は「成長戦略実行計画」に「国民が well-being を実感できる社会の実現」をあげている。世界に比べると遅いのかもしれないが、今から実現に向けてすすめるべき事案だ。厚生労働省は、「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念」だとしている。

今度の「水」との関わり方について、私は改めて考えた。先進国では、節水し、浄水の技術の向上と雨水以外から水を作り出す研究に力をいれるべきと考える。発展途上国では、地殻調査の実施と上下水道の整備、技術者の養成が必要だと考える。これが、これからの地球上に住む人間全ての「水」に対する「幸福」なのではないかと思う。私達は未来のためにできることを世界全体で考え、実行しなければいけない状況に直面している。

入選

水という命

群馬県　群馬大学共同教育学部附属中学校　二年　内田　崇法

幼い頃、ぼくは両親に連れられて赤城山の湧水を汲みによく出かけた。そこは、住んでいた前橋市の市街地から車で片道五十分かかり、途中で鹿に出会う山の中腹にあった。山の家の一角にある水を汲む場所から次々に溢れてくる水は、透き通ってきらきらと輝き、初夏でも触れると手がキンと冷たくなった。一口飲むと、おいしくてさらに飲みたくなり、遠くに山のにおいを感じる味がした。「本来の水は、こんなにもきれいでおいしいものなんだね。」と母がしみじみ言った。この出来事は、ぼくにとって本当の水の美味しさ、美しさを知る体験になっていた。それから両親と群馬県にある名水をいくつか訪れた。そこでは、必ず水を汲む人達の順番待ちをする光景が見られた。「なぜ美味しい湧水が多くあるのか」当時を思い出してぼくは疑問に思い、理由を調べた。

環境省が示す群馬県の湧水件数は二一〇件で、代表的なものは五四件ある。全国では一〇位だ。また、全国には合計一六〇四六件もの湧水があり、「名水百選」も含まれる。日本は美味しいと感じる水が、自然に湧出する場所の多い環境のようだ。山間部に降った雨や雪の水が地面に浸み込み、長い時間をかけて土や落ち葉、枯れ木などにろ過される。岩石層の亀裂より浸透した水は帯水層の隙間を流れる地下水になる。地質構造や地層、岩石、地下水経路により地下水は涵養され、数年から数百年かけて湧水として流出するという。今流れている湧水は今の水ではなく、大地が時間をかけ蓄えていた水であった。僕達は大地から大切に蓄えた水をもらっていたことを知り、温かい感謝の気持ちが沸き上がった。

大地の働きのみでなく、空からの水は最初に山間部が受け、森林による土壌の隙間に浸透して貯蔵される。森林があることで地表は崩壊しにくい状態を保ち、渓流の水が枯渇しないことや安定的な河川流量を得られるという。また、森林土壌から渓流へ流出する為、濁りが少なく、土壌のミネラルを適度に含んだ中性に近い水を作るという、水質を浄化する機能を持つ。こうした森林を日本は国土の七〇％程保有する「森林大国」の環境にある。これらの森林は、日本が火山活動により誕生した結果、形成された地形、地質の上に気候の影響を受けて繁茂している。さらに森林が生成する土壌環境が相互に機能し、「きれいでおいしい湧水」をもたらしてくれている。どの要素が欠けても十分にはならない。僕達が水を得ることは、森林と土壌がもたらす複雑なメカニズムや大地に支えられた地球からの恵みをもらうことなのだ。水は地球が生成した環境によって「生きる水」に変化しているように思える。人間の立場から見れば、それは大自然から命を与えてもらうことと同じなのかもしれない。そう考えると、水が一層大切に思えた。

授業で学習した、畠山重篤さんの著書『森には魔法つかいがいる』の中で、「森林の腐葉土が生産する『フルボ酸』は水中の鉄と結合した『フルボ酸鉄』となり、海でカキの餌である植物プランクトンを発生させる。つまり、「森と川と海は一つ」なのだ」と、畠山さんは、カキの養殖業を通して海から森の存在の重要性に辿り着いた。海の豊かさは森を知ることから始まるように、水を知るには森を知ることも大切だと痛感した。

日本は水の恵みを受けているが、世界では水の汚染や枯渇により命の危機に直面している人達も多い。人の生活が水の汚染に直結し、マイクロプラスチックの混入による海洋への汚染の問題も人命だけでなく、生物すべての命に影響する。水の循環と関係のメカニズムについて正しい知識を持ち、命を与えてくれた地球へ循環できる生活を作り出すことが、僕らの課題と責任である。

入選

この一滴はどこから

東京都　学習院女子中等科　三年　下野　理央

「今から二時間は自由時間です。」

みんなが歓声をあげながら一斉に芝生を駆け下りた。坂の向こうには、海が広がっている。しかし、ここはただの公園ではない。私たちは、シンガポール日本人小学校の校外学習の一環として、マリーナ・バラージに来ていた。ここは家族で楽しめるピクニックスポットとして市民に親しまれているが、二〇〇八年に完成したシンガポール最大の貯水池でもある。

シンガポールは淡路島ほどの小さな国土に人口約五六〇万人がひしめく超過密都市でありながら、標高が最高で六〇〇メートルほどしかなく水源を持たないので、水を確保するために、貯水池を国内に十数箇所設けているそうだ。目の前に広がるマリーナ・バラージは国内最大の貯水池というが、日本のダムと比べると規模が小さく見える。このような貯水池が十数箇所あったとしても、とても国民全員の水を賄えるとは思えなかった。

そこで、家に帰ってから、シンガポールがどのようにして水を確保しているのか、調べてみた。

すると、驚いたことに、シンガポールは、約五〇年前に建国して以来、水をマレーシアからの輸入に頼っていることが分かった。貯水池に溜めた雨水を浄化して得られる飲料水は、全体のわずか一〇パーセント程度に過ぎないそうだ。

そこで、シンガポールは、水を自給することを目指して、再生水の利用や海水淡水化にも積極的に取り組んでいる。

再生水の利用とは、具体的には、下水を一度浄化処理した後、さらに高度な処理を施して再利用することだ。この下水からの再生水は「ニューウォーター」と名付けられ、産業用水として利用されるだけでなく、飲料用の水道水にも一部混ぜられていることを知った。二〇六一年がマレーシアからの水の輸入の契約期限となっているため、二〇六〇年をめどに、ニューウォーターの生産能力を一〇倍にまで高めて、国内で完全自給することを目指しているそうだ。ただ、いくら浄化したとは言っても、もともと下水だったものを飲んでも大丈夫なのか、と不安も感じるが、実際に家の水道水を飲んでも臭いがしたりお腹を壊したりしたことはないので、大丈夫なのだろう。

海水淡水化は、海水を脱塩して真水を得る方法だ。現在では、国全体の水需要の二五パーセント程度を満たせるまでになっているそうだ。日本の会社の技術も使われているそうで、何だか誇らしかった。

ワシントンを拠点とする世界資源研究所は二〇一五年、世界で最も水が不足する国の一つとして、シンガポールを挙げていたが、再生水の利用や海水の淡水化が急速に進んでいることから、この予測を技術によって覆すだろうと考えられている。

そして、このような技術がもっと世界中に普及すれば、アフリカの一部の国のように水不足が深刻な地域においても、技術によって問題を解決できるのではないだろうか。

ただ、下水の再生や海水の淡水化は、良いことばかりではない。より多くのエネルギーを要するため、二酸化酸素の排出量が増大するという問題がある。今後、更なる技術の発展によって、この問題は徐々に克服されることを期待している。

水問題を調べてからは、水を飲むたびに、この水はどこから来たのだろう、と考えるようになった。そして、「一滴たりとも無駄にできないな」、そう強く思うようになった。

入選

水害から人々の暮らしを守る工夫

神奈川県　聖園女学院中学校　一年　植松　舞花

私は今回、水に関しての二つの経験から知ったことや感じたこと、そしてそれらについて自分なりに調べ、学んだことをまとめた。

一つ目は、遊水地についてである。遊水地とは河川堤防の一部区間を低くしておき、そこからあふれた洪水を溜め、地域への水害の被害を軽減させるためにつくられた池のことである。私は藤沢市に住んでおり、小さい頃から公園が好きで毎週のように家族に「引地川親水公園」に連れて行ってもらった。この公園は、子ども達に川に親しんでもらおうと引地川沿いに造られ、湿性植物や桜並木、芝生広場などがあり家族でゆっくり楽しめる。四季折々の植物や昆虫、野鳥も観察でき、川では鯉が優雅に泳ぎ、空を見上げるとカモメがたくさん飛んでくる。私はこんな自然あふれる公園の景色を見て、毎回いやされている。そしてある時ふと、次のような心配事が浮かんだ。大雨が降った後に引地川の水位が上がり、この公園や周辺に水害の心配はないのかと。そのことを父に聞くと、「この公園には遊水地があるから大丈夫だよ。」と教えてくれた。このことを思い出し今回詳しく調べてみると、私たちがいつも止めている駐車場とそのとなりにあるサッカー場が、全体で約二十八万立方メートルもの水をためることができる遊水地であることがわかった。その遊水地に実際に水がたまった様子を見たことはないが、洪水時の写真を見ると駐車場やサッカーゴールは大量の水で見えなくなっており、辺りは一変していて驚いた。つまり普段は私たちが便利に使える土地が、洪水時には遊水地としての役目を果たす土地へと変わる。とても効果的な土地の使い方であると思い、感心した。この遊水地は、昭和五十八年から平成五年までの約十年間かけて作られたということから大変な取り組みであったことがわかり、まわりの人にも伝えていきたいと思った。

二つ目は、「雨水貯留管」についてである。これは、大雨が降った時に道路や家に水があふれないように、一時的に水を貯めておくものである。この貯留管の存在は、母の体験談から知った。石名坂善行線という道路は急坂で囲まれていて、大雨の日には道路に水がたまることがしばしばあった。母が自転車で通ったその日は大変な大雨で、自転車のタイヤがかなり水に沈むほどだった。恐る恐る自転車で走行していた母であったが、隣を通る車が跳ね上げた大量の水が次々と勢いよく全身にかかり、恐怖を覚えたというのだ。しかし今はこの道路の地下に「山野神雨水貯留管」が作られたおかげで、私は今まで一度もこの道路が水であふれているのを見たことがない。これは地下二十メートル程の深さにあり、長さは五九六メートル、そして約三一〇〇トンもの量の雨水を蓄えることができる優れものである。藤沢市は「雨に強いまちづくり」推進のため、雨水管整備や治水安全度の向上などに取り組む「湘南ふじさわ下水道ビジョン」を二〇一一年に策定し、請負金額約十六億円をかけたこの工事はその一環である。これを機に、市内に整備されている他の貯留管に関しても調べたり、実際に行ってみたりしたい。

今回「水」について自分なりに調べ考えることができ、よい学びとなった。水は人類が生きるために不可欠であり、またいやしの効果もある大変貴重なものだ。私たちがこの貴重な水を守っていくためにすべきことは数多くあるが、私は節水をすること、食器の油分を拭き、なるべくきれいな状態で排水して水を汚さないことを常に心がけて過ごしている。

私たちが日々きれいな水を飲み、使用し、水害の心配なく過ごせていることはけっしてあたりまえではない。人々の暮らしを守るために、綿密な計画を立て、工事を行ってくださる方々が数多くいらっしゃることを改めて感じた。感謝の気持ちを常に持ち、自分にできる水の取り組みを考え、継続していきたい。

入選

水が創り出す故郷の風景

新潟県　新潟大学附属長岡中学校　三年　新保　心菜

日々の生活は水から始まり水で終わる。今まで水は蛇口から簡単に出て、水は飲むもの、水を用いて洗うものなどを実用的な部分しか捉えていなかった私に、水の存在が生活に彩りを添え、故郷の風景を醸成してくれる存在ということを教えてくれた出会いがあった。

コロナ禍前の夏、外国の方との交流で数日間生活をともにする機会があった。二人ペアで行動することになり、言葉の通じない私達は戸惑い、何を話してよいか分からずにいた。田植えを体験したいという希望があり、初日には母の実家で田植えの一日を過ごした。

到着するなり一面に広がる水田の風景に感嘆し、陽光が反射してキラキラと輝く水田を魅了している様子だった。田んぼに近づくにつれ、田に引く農業用水が優しい音を奏でながら田に流れ込んでいく様子、目で見る緩やかで柔らかな水の流れにとても感銘を受け、しばらく見入っていたのは印象深い。実際に苗を植える為、作業着に着替え、いざ田んぼの中へ。慣れない水田に足を取られながら進む。誰かが足を移動する際に響く音。ピチャン、チャポンと響く足の着く強弱により様々な音を立てる水に楽しさのあまり笑い出し、私達二人はその瞬間を存分に楽しめた。言われてみれば聞いていくうちにその独特なリズムと音に心地よさを抱いた自分がいた。子供の頃から手伝ってはいたけど、新たな視点からより一層田舎の風景が誇らしく思えた。自宅前の水田は太陽の光によって朝昼、様々な表情を見せ、夜になれば田んぼから聞こえる蛙の大合唱は、田植え前の水田に水を張った時から独唱に始まり、日に日に大合唱へと発展する。水田がなければ、この賑やかなサウンドを聞くこともないだろう。

田植えの休憩時間には、生前祖父が鑑賞に飼っていた鯉の池に案内し、降り出した小雨により鯉の雨粒が水田に落ちた際にできる同心円状の波動が作り出す円の模様と、色鮮やかな鯉の絵画のような光景や光が織りなすコントラストが素敵だと目を輝かせながら感動してくれた。いつもは田舎という言葉は少し古くて後れを取っているという意味で用いていたが、むしろ誇らしく、都市部にはないこの自然豊かな光景の背景には、水の存在があり、心穏やかに日常を送れるのは視覚的、聴覚的に心地よいリズムを醸し出してくれる水の恩恵だと感じたひとときだった。

他国の人と行動を共にする中でそれぞれが自国の水に対する考えを再認識し、互いの良さを分かち合えた。また日頃、当たり前と考え、注目することがない事柄も、別の視点から再認識することができた。

交流の最終日には日本の文化を少しでも思い、山から切ってきた竹で流しそうめんをした。

すぐ身近に水がある環境で、五感全てで感じ取れる日本が羨ましいというようなことを言ってきたことは、水に対する意識が変わった瞬間だった。

身近に水がある、水が流れるということに対しての心地よさや風情は私達の食生活をより豊かにしてくれる。その実用的な部分と、私達の気分を穏やかにしてくれる水。流れる水の心地よい音とゆらゆらと静かに波を打つ美しさは私の心を自然と落ち着かせ、支えてくれている。様々な文化の違いの背景には、水のあり方、存在が関係しているように感じる。

世界中で蛇口から出る水を直に飲用できる国は少ないということは知っていた。彼女はそれに感動していたが、田舎の水のある生活、特に水の音や水の流れる様子からこの風景や文化は守っていきたい、それには水の恩恵がある。水を大切に考えたいと思った。

直接的にも間接的にも存在は大きい。今改めてそう感じる。

入選

美味しい水をいつまでも

富山県　黒部市立清明中学校　二年　近川　藍子

私たちの住んでいる黒部市には、清水（しょうず）と呼ばれる湧水がたくさんある。特に生地（いくじ）という地域では、地域の方々の共同洗い場としても使われている。それだけ、黒部は地下水が豊富なのだ。そして、私が水の凄さや、私たちが恵まれているのだということを感じた思い出がある。

小学校四年生の時、私は校外学習で浄水場の見学に行った。当時の私としては難しい話が多かったが、浄水場できれいにした水と地下水の飲み比べをした記憶がある。その後に職員の方が「黒部の水道から出る水は、地下水をきれいにした水なんですよ。」と言ってくださった。ほとんどの水道から出る水は、川の水を汲み、何段階もかけてきれいにした水が届くのだそうだ。一方、黒部などの一部の場所では、地下水を汲み上げ、きれいにして私たちのもとへ届く。その工程は二段階ほどだった記憶がある。消毒薬もあまり使っていないため、蛇口から出る水もおいしいのだ。

しかし、調べてみると地下水を汲み上げることには、問題点もあるということがわかった。その一つは地盤沈下だ。地下水は、地盤を支える役割があるため、汲み上げすぎると地盤沈下が起きてしまう。

また、水の汲み上げすぎにも問題がある。地下水は雨が降ってから三十年～四十年かけて湧水として出てくるのだ。つまり、今、降っている雨が、地下水として私たちのもとへ届くのはとても後のことだ。今、水をたくさん汲みすぎると、水不足になってしまうかもしれない。地盤沈下も水不足も起きてはほしくないものだ。

ただ、きれいで美味しい地下水や湧水は、古くから私たちや世界中の人々の生活にとって欠かせないものだ。今は、水道からの水を使っているが、元をたどれば地下水だ。しかし、蛇口をひねれば地下水が出てくるのに、清水がこれほどにも私たちの生活に根付いているのはなぜだろうか。

私は保育園の年中のときに、十キロ遠足という行事で生地を歩き回った。当時の私は、黒部市外に行けないということで、乗り気ではなかった。だが、今思うと清水に触れるのはこれが初めてで、地域について知る良い機会だった。道中にある清水は、少し休憩して水分補給などをする絶好の場所だったと思う。清水は、水を使うためだけでなく、休憩場所や憩いの場として利用されているため、私たちの生活に根付いているのだと思う。

地下水は、今までも、これからも私たちにとって欠かせないものだ。美味しい水がいつまでも飲むことができるように節水を心がけていくとともに、水が好きな時に飲めるという感謝も忘れないようにしたい。

また、地域の伝統として残っている湧水、清水を大切にしていきたいと思う。清水巡りスタンプラリーのようなことをすれば、小さい子供たちも、とても楽しく、水のこと、そして地域のことを知ることができると思う。このような水を通した人々のつながりのおかげで、美味しい水を私たちは飲むことができているのだと思う。

入選

水から学ぶ

福井県　勝山市立勝山北部中学校　三年　廣田　真里菜

私の家は川のそばに建っている。弟をつれて、毎日川に遊びに行くこともあった。いつも川には、美しくきれいな水が流れていた。小さな魚が群れでよく泳いでいて、それを眺めるのが私は好きだった。

そんな美しい川が姿を変えたのは、去年の夏だった。朝起きて外を見ると、川の水の量がいつもの倍近くあった。でも、雨も降っていたし、前にも同じくらいの量になったことはあったので、多いなぁくらいにしか思っていなかった。おかしいと感じたのはそのすぐあとだった。まだ朝のはやい時間に、仕事のはずの母が学校に私を迎えに来た。

「川があふれたらしい。家が危ない。」

母はそう言った。家に帰ろうとしたが遅く、家は川にのみこまれていた。どこが川でどこが道かなんてわからなかった。美しく透き通っていたはずの川の水は、茶色く、濁っていた。雨はいつまでも降り、川は激しく暴れ狂う。いつも見ていた川の恐ろしい姿に、私はふるえた。家が水につかったことで、蛇口をひねっても水は出なくなり、トイレも流れなくなった。川が猛威をふるったのはほんの一瞬でも、私たちの地域は大きな被害をうけた。私の中には「水は怖い、川は危ない」という印象がつみあがっていた。

水害から何ヶ月かたっても水に対する恐怖はぬぐいきれなかった。川には近づかなくなり、雨も大嫌いになった。いつまでもこのままでいいのだろうか。そんな思いが頭に浮かんだ。どんなに願おうと雨は降るし、川をどこかに移動させることはできない。自分から水について知り、共に生きていくしかないということに気がついた。それから、水について調べることを決めた。

まずは、水の良いところを知ろう。そう思って調べ、私はあるものをみつけた。それは「水の恵みカード」というものだ。私たちが口にしている農産物は、水の恵みがなければ育たない。このカードでは、農産物を通して水の大切さやありがたさを知ることができる。私はこのカードのおかげで、水の新しい一面を知ることができた。

水についてたくさん調べていくうちに、この世界から水がなくなったらどうなるんだろうという疑問がうかんだ。水がなければ、お風呂にも入れないし、トイレも流れない。野菜も育たなくなり、人間だけでなくさまざまな動物の食べるものがなくなってしまう。その先に見えるのは、おそらく死だろう。水がなくなるということは、私たちの命が危険にさらされているということなのかもしれない。

それでも人間は雨を嫌う。大切な水だとも言えるが、害であると思う人も多いのではないだろうか。でも、水がじゅうぶんに手に入らない国の人はどう思うだろう。何十キロも何百キロも歩かないと手に入らない水。それによってうばわれる時間。そんな水が空から降ってきたら、恵みだと思うのだろうか。

水には良い一面も悪い一面もある。水は、私たちが食べるものを育ててくれる。たくさんの産業が水によって成り立っているとも言える。でも時に水は、洪水として私たちの命や生活を脅かす。農作物や財産、時には命も一瞬にして流しさってしまう。生まれてから死ぬまで、私たちのそばにはいつも水がある。水と共に生きていく私たち。水から恩恵を受けるばかりで、私たちは水に何かできているだろうか。水を傷つけていないだろうか。汚れた川、落ちているごみをみてみぬふりでいいんだろうか。水について学び、知り、伝える。なんとかしたいというその勇気を、行動にうつさなければ、なにも変わらない。水と共に生きていくうえで必要なことを、もう一度、考えてほしい。

入選

当たり前とは？

岐阜県　川辺町立川辺中学校　三年　木下　真心

私達がいつも飲んでいる「水」それは私達が生きるうえに最低限必要な要素であり、尊く、儚いものです。私が水の大切さに気づくことができたのは、水の不足に苦しむ人々について知ったからです。

私が小学五年生の頃、父の仕事へついていき、中国へ行きました。父が働く都市部では、ビルが建ち並び、パレードのような行事でたくさんの水しぶきをあげるほど、不自由なく豊かな生活をしていました。町行く人もきっちりとしたスーツ、少し派手なワンピース、どこから見ても生活に困っている様子はありませんでした。そこで私は父に、

「裕福な人が多いんだね中国って。町並みもきれいだし、住みやすい国だね。」

と、見て感じたことを素直に話しました。すると父は、私が思ってもみなかったことを中国の町並みを見つめ、私に言いました。

「中国の都心部は、きれいで華やかな町だなあ。でも、田舎のほうがそうとも限らん。明日行ってみるか。」

父はそう言い、実際に自分で見て体験した方が記憶に残り、理解しやすいだろう。と私を翌日、都市から少しはなれた町へ連れていきました。父に田舎はきれいで華やかとは限らないと言われても、自分が日本で住んでいる町よりも、大きく発展した町を目の当たりにして、「田舎は発展していない」という事実をそう簡単に理解できるはずもなく、半信半疑のまま、父についていきました。

一時間ほど、車に乗っていると、しだいに道が安定しず、ガタガタとゆれ、建物が少なくなりました。しばらくし、目的地につくと予想外な光景が広がっていました。そこには、乾燥で水がかれ、ひび割れてしまった畑、なくなってしまった川などがありました。現地の人に父が話を聞くと、

「水はかれ、作物が育ちにくくなってしまった。都市の子供達が勉強している間、ここの子供達は水を探しに行っている。」

と言っていました。そして、水不足や食料不足により、治安も悪くなってしまっていました。正直、そのような土地に行くことはとても怖かったけれど、水が枯れた土地や、食料、水を求める人々を実際に見ることができて、より、蛇口をひねったら水が飲めることや、豊かに作物が育つことは、とても大切でありがたいことだと気づかされました。

都市部へと戻り、楽だと思っていた車での移動や、簡単に店などで出される水は、ただ便利だと感じることはできなくなりました。そして、少し時間が過ぎた頃、父に、

「ああやって、どんなに裕福に過ごしている人が多くても、細かく見てみれば、自分達の当たり前が、一年に一度ぐらい、たまたまやってきて得られる人がいるんだな。」

と言われ、「当たり前」がどれほど貴重なものかを理解しました。

私達があまらすほどに使っている「水」。私達がこぼしたり、残したりしたその一滴は世界の誰かが死にものぐるいで得た水の量と同じかもしれない。誰かが大切なものを捨ててでも飲みたかった一滴かもしれない。そんなことを心におきながら、「当たり前」を大切に生きていきたいです。

入選

水の恵み

愛知県　設楽町立津具中学校　二年　村松　真波

私が小学生の頃から毎年、蒲郡のみかん農家さんからおいしいみかんをいただいています。しかし、どうしてみかんをいただけているのか、気にもとめていませんでした。みかんと一緒に付いてくるメッセージには、「いつもきれいな水を届けてくれてありがとう。」と、書かれています。そのメッセージにどのような意味があるのか、考えてみました。

私の住んでいる北設楽郡設楽町津具の標高は、約七百メートルあります。標高が高いので、夏は涼しく、冬は寒いです。夏は川で鮎のつかみ取りをしたり、川遊びをしたりします。川で取れた鮎はとてもおいしいです。きれいな川だからこそ、おいしい鮎が育つのです。そして、きれいな川だからこそ、毎年、川遊びをしたいと思えるのです。また、初夏の夜には、蛍が飛んでいるのを見て、楽しむこともできます。蛍はきれいな川でしか生きられない生き物です。私はそのようなきれいな川が流れる地域で生活しています。

私の町の川の水は、下流域に住む人たちへと届きます。その水を使って、農作物を育てたり、元気な家畜を育てたりするそうです。蒲郡のみかんもこの水を使って、作っているそうです。おいしいみかんを育てるには、きれいで豊富な水が必要です。私たちがみかんをいただけているのは、川の水がきれいな状態を保っていることに感謝してくださったのだと分かりました。川がきれいに保たれていることがどれほど大切なことなのかを、改めて実感しました。

しかし、きれいな川でも人の力で簡単に汚れてしまいます。そこで、津具中学校ではきれいな川を保つための活動として、年に一回河川清掃を行っています。川の中や周辺のごみ拾いを親子で行う活動です。毎年清掃を行っているため、ひどい汚れはありません。けれども、よく探すと流されてきたプラスチックごみや空き缶、農作業用のネットなどがありました。これらは人が出したごみです。このようなごみを川に捨てないという、一人一人の意識が大切だと思いました。河川清掃をしていると、生物が生きやすい環境をつくっていると感じ、とてもうれしい気持ちになります。今年度の河川清掃も、真剣に取り組みたいと思います。

私は設楽町津具の川がいつまでもきれいな状態であってほしいと思います。川がきれいなことで、笑顔になる人がたくさんいます。そこで、私たちが川の水を汚さないようにするためにできることを、二つ考えました。

一つ目は、川の清掃です。津具中学校には河川清掃がありますが、やはりそのような活動はとても大事だと思います。たまに川を見ると、ごみが浮いているのを見ます。年に一回だけでなく、活動をもっと増やしていきたいと思います。

二つ目は、家庭からごみや汚水を川へ流さないことです。プラスチックごみなどは、絶対に川に流してはいけません。また、料理などで出る油や米のとぎ汁を流さないようにする工夫も必要です。油は、キッチンペーパーでしっかりと拭き取ってから食器を洗うとよいと思います。米のとぎ汁は、そのまま捨ててしまうのではなく、苗木や鉢植えなどの水やりに使うとよいです。他にも、洗濯や掃除に使うという方法もあります。このように、川の水をきれいに保つための方法を考え、みんなで実行していけるとよいと思いました。

水は生きていく中で必ず必要なものです。私はこれまで、水について深く考えることはありませんでした。私のような人は多いと思います。最後になりますが、この作文を読んでくれた人たちが少しでも、「川の水を汚さないために水を再利用しよう。」と、意識してもらえたらうれしいです。私は、水一滴を大切にして川の汚れにつながらないよう、これから生活していきたいと思います。

入選

僕の決意

三重県　高田中学校　一年　山中　健資

「ちょっと誰かあ。シャワーのお湯が止まったんだけどー。」
お風呂から姉の声がした。
リビングでくつろいでいた母が見に立った。
「えっ、本当に水が止まっているよ。何が起こった？」
慌てた母の声で皆に緊張が走った。
二〇二三年一月二十五日。十年に一度と言われた最強寒波が日本列島に襲来した日だ。僕の住んでいるところは、霜が降りるのもひと冬に十回ちょっと、雪は数年ごとに何回か降る程度と、比較的温暖な町だ。ところがこの日は、後に聞いたところではマイナス八・七度まで気温が下がっていたらしい。そのためにマンションの北側に設置されている受水槽への流入管内で水が凍結し、夜に多くの家庭で水を使用するにつれて受水槽が空になったのだという。
さあ困った。幸い浴槽にお湯が張ってあったため、汲みだして使おうとしたが、シャワーに頼る生活になっているので、洗面器がない。台所のボウルを動員して入浴は済ませた。バケツに汲んで、トイレを流した。既に用意してあった食事を済ませたが、いつものように食器に盛りつけてあったため、まず汚れを紙で拭き取った。五人分の食器を拭き取るのに、多くの紙が必要で、ごみ袋はあっという間にいっぱいになった。拭くために手を汚してしまい、水で洗わざるをえなくなった。洗剤を使わなくてすむものはスポンジでこすって、すすいで終了。皿や箸は洗剤を使って洗い、ためすすぎをしてから、仕上げすすぎをした。皿をすすぐ母の動きに合わせて僕はペットボトルから水を流して手伝った。備蓄の水は限られているため無駄にはできない。すすぐ作業に合わせて二リットルのペットボトルの傾きを調整してチョロチョロと流し続けるのは、思っていたより大変だった。ずっしりと重かったペットボトルがだんだん軽くなっていく。楽になってきた、と思う一方で、使えば目に見えて減っていく様子にふと、水って有限なんだった、と思った。水がなくなっていくことに焦りを感じ、無駄にするまい、とペットボトルを支えなおした。
世界では、十分な水が得られる地域は多くないと聞く。安心安全な飲み水ともなると、さらに限定的だ。持続可能な開発目標（SDGs）にも「安全な水とトイレを世界中に」とあるように、安全な水を手に入れるための取り組みが今、世界中で行われている。内戦が激化したスーダンもその地域の一つだ。退避が報道されるようになってはじめて、スーダンに多くの日本人がいることを僕は知り、その人たちの多くが、水や食糧、医療の支援に携わっていたことを学んだ。退避によって支援が滞るだけでなく、その支援によってこれまでに届けられた水関連施設が、爆撃で破壊されたと聞く。生きるためにようやく手にした安心安全な水を、また人が奪っていく。過農耕や過放牧、過剰採取による砂漠化も、地球温暖化も、人が後先考えずに行動した結果だ。これから何十年も先のことを考えて行動すべき時にきている。その時代を支えていくのは僕たちだ。
幸い、家の断水は二日ほどで徐々に解消されていった。その後もしばらくは、「今、水を使っていいのか」「水を使わずに乗り切る方法はないのか」と身構えてしまう習慣が残った。正しく節水できたのだろうか。手を洗う回数や洗濯を減らすのは衛生的にどうだっただろうか。食器を拭き取る作業のせいで紙ごみが山のように出たことや、皿を汚さないようにラップで覆うためにプラスチックごみが増えたのは、果たして正しいことだったか。僕の中にはモヤモヤが残った。蛇口から出る水は無限ではない。譲り合って世界中で安心安全な水を飲めるよう、未来を見つめた行動をしたい。

入選

水と共に生きる

京都府　京都先端科学大学附属中学校　一年　三ツ木　丈琉

私は、自然が好きです。そして、母のふる里が大好きです。

その場所は、大阪でたった一つの村、千早赤阪村です。人口は四千八百人余りの小さな村です。森林の面積が村の総面積の八割を占めています。昔から棚田を利用した米作りが行われています。祖父も五十年以上、米作りを続けています。祖父は、「水がきれいだからおいしい米が作れる。」とよく話しています。私は、祖父の作ってくれたお米が一番おいしいと感じます。

春休みに、祖父が水の水源を見に行こうと言ってくれて、初めて祖父母の水道の水源に連れて行ってもらいました。

車で少し走り山の中に入りました。民家が無くなると杉林の中に林道があり、植林された木の中には百年以上前のものもあると聞きおどろきました。左右に大小さまざまな木や草が生いしげり道とは言えないほど狭い山道でした。車を止め、けもの道のような道を歩いて谷川の方に行きました。すると、川の流れがしだいに小さくなり、水源に着きました。小さな小さな川をせき止めて、水以外の物が入らないように網が張ってあり、下には水を運ぶのに必要なパイプから小さなマスに入り、そこから二本のパイプが川を通り沈殿タンクに送られていました。そして、余分な水はタンクから川に戻されていました。私は、簡単な仕組みと形だけど、浄水場の様に水がきれいになっていたことに、よく考えられているなあとびっくりしました。

そして、パイプが山の中を通り、祖父母の家の近くの山の貯水槽に水が貯められていました。そこから二本のパイプで水が各家庭へと送られているようです。

私は初めて水源を見て、一滴、一滴の水が小さな流れを作り、山の奥のあんな小さな所から、水を集めて大きな流れを作って私たちの元に届いているのだなあと、とてもおどろきました。

また、祖父が「水源から水を引くためには多くの人と協力し助け合わないといけない」と言っていたことも心に残っています。

二十五年前までは、生活水はすべて山の水だったので、大雨で水がにごったり、断水などの事故が起きてしまったり、日照りが続くと水が減ってしまうこともあり、天候に左右されて飲み水の確保は大変だったと話してくれました。

そして、祖父から森には水源かん養機能があると聞き調べてみると森林は雨や雪などの水を少しずつ川に流してダムのような役割をしているということを知りました。水は地球の生き物が生きていく上で大切なものです。水の始まりを見て地球の雄大さを理解でき、水は無限のものではないということを、改めて見つめ直しました。

水とどう付き合っていくかを考えたときに私の住んでいる京都のことを思い出しました。

昔、父が京都にはたくさんの地下水があると言っていたことを思い出し調べたところ約二百十一億トンもの水があり水が豊かなところだと知りました。ですがこの大量の水を有効活用するために長く維持することが大切です。京都はこの地下水があるおかげで、染め物や食事などのすばらしい文化が発展してきました。京都から生まれた文化は豊かな地下水があるということが大きな影響を与えています。水は人々の文化や、生活を大きく変えてきました。今では水の汚染や、ゴミだらけになった川などもあります。これからは私達の周りにある水の環境の事を考えていかなければなりません。

私は、これから水を大切にしつつ、水を通じて社会や世界のさまざまな環境も意識していこうと思います。

入選

水都大阪と呼ばれ続けるために

大阪府　大阪府立水都国際中学校　一年　村井　桃恋

私の住むまち大阪は「水の都」と呼ばれている。ぐるりと巡る河川や堀川を利用した水運が盛んで、川とは深い関係にある。

そんな水都大阪の観光の一つに、東横堀川でのサップ体験がある。誰でも楽しめる水上体験だ。私は小学校の卒業遠足を提案する学習で、この体験が入ったプランを提案し、実際に遠足で行くこととなった。当日は円盤状のサップの上でご飯を食べたり、みんなで漕いだりして楽しんだ。ボートの上、川に反射した光の中、街を見上げる。水で溢れる水都大阪ならではの体験で、何より、友達と体験できたことがとても嬉しかった。

しかし、こんな体験をさせてくれた大阪の川にも欠点がある。水質だ。私たちが訪れた川も綺麗とは言えず、無臭だが緑ににごっていた。サップのガイドの人によると、これでも昔よりは綺麗になったらしい。証拠に、最近この東横堀川と繋がっている道頓堀川で、ニホンウナギが見つかったそうだ。しかし、絶滅危惧種のウナギが見つかったなんて本当だろうか。

大阪市の中心にある道頓堀川。高度経済成長の時に工業廃水が垂れ流された影響で、汚染が深刻になった。まだ大阪の浄水技術は低く、今よりもさらに汚かったそうだ。おどろいたことに、川にはカーネルサンダースの像や自転車も投げ込まれていた。油の膜が張り、ボウフラさえ湧かない川は悪臭を放ち、「ドブ川」とも呼ばれた。当時の画像を見た時は、墨汁のような黒さで絶句した。

その状況を打破しようと、一九八〇年ごろから水質改善への取り組みが始まった。まず、水質浄化が期待できる噴水が設置され、次にヘドロを取り除くための船の運航が開始された。浄化作用のある真珠貝の養殖も行われた。「どうせやっても真珠は真っ黒やろ」と思われたが、ピンク色の綺麗なパールができたそうだ。しかし、まだ川は綺麗にならなかった。商店街の活動で金魚が放たれれば、すぐに数匹が水面に浮いてきてしまったし、人が飛び込めば病人も出た。それでも水質改善への取り組みは続いた。二〇〇〇年には水門が作られ、淀川の水を道頓堀川に流す「入れ替え」という仕組みもでき、下水処理の精度も上がった。サケやアユが住める水質だということが数値によって判明し、水質が概ね改善傾向にあるということも調査で分かった。でも私は大阪に住んでいながら、大阪の人々の川に対する努力を微塵も知らなかった。私より先にニホンウナギは、人々の努力に気付き、川に帰ってきてくれたのだ。

水都大阪を支える川。そして、卒業前にみんなとの思い出をくれた川。でも、これまでの努力をもってしても、まだ透き通るには至っていない。改めて水を綺麗にする事の大変さが分かった。二〇二五年には大阪万博が開かれるが、この現状ではまだ「大阪は水の都です」と胸を張って言えない。だから、一大阪人として水を綺麗にしたい。まずは知ってもらうことから。ＳＮＳを使えば、多くの人、特に若い人に今の大阪の河川の状況や取り組みについて知ってもらえるだろう。そして、その人たちにも、自分のできることを探して取り組んでほしい。私自身も、今まで気にもしなかった生活用水の使い方を考え直したい。例えば、小さなゴミも流さないことや、植物由来の洗剤を使うことなどだ。他にも、カイロは汚れた水を綺麗にする効果があるそうなので、集める事にも協力したい。一つ一つは小さな活動だとしても、それが波紋を呼べば大きな波になる。だから私は、それを信じて活動しようと思う。

大阪の川の恵みは周りに文化を作り、物流を発展させ、大阪の人を支えてきた。だから、これからも水都大阪と呼ばれ続けるように、そしていつか「大阪は水の都です」と胸を張って言えるように頑張りたい。

入選

地域の中で生きる「水」

奈良県　奈良市立富雄第三中学校　三年　落合　一葵

それは小学三年生の夏休みのことだった。私の通っていた小学校では、毎年夏休みの宿題として自由研究をすることになっていた。三度目にしてすでにテーマを何にするか迷っていた私に、母が薦めてくれたのが「カバタ」だった。はじめて聞く言葉だなぁ、と不思議に思いながら、「カバタ」について調べてみることにした。滋賀県の針江地区に残るカバタ。漢字では、「川端」と書くそうだ。地下から湧き出た水を大きな囲いに流し、そこで野菜を洗ったり、果物を冷やしたり。あるいは湧水を飲んだり、沸かしてお風呂に溜めたりする。そのスペースを「カバタ」と呼ぶのだと言う。幼い頃から美味しい水が大好きだった私は、すっかり「カバタ」が気になって仕方なくなり、それを自由研究のテーマに決めたのだった。

針江集落を見学するためにはガイドを申し込まなければいけなかったため、すぐに見学を申し込み、早速夏休みの中頃に針江へ向かった。琵琶湖のほとりに位置するとは言え、夏の針江は暑かった。しかし、受付を済ませて集合場所へ向かってみると、目の前には大きな川がこんこんと流れていた。それに道の端にはどこまでも続きそうな水路があり、それをのぞきこんでみれば、何匹か鯉が泳いでいる。川のせせらぎを聴き、悠々と泳ぐ鯉を見つめて、幾分か涼しくなった心持ちでいれば、ガイドの方がやってきた。私たちは、ガイドの方に案内していただきながら、様々な家のカバタを巡った。空き地の片隅、家屋から少し離れた小屋の中、おうちの庭。様々な所にあるカバタを訪れながら、たくさんのことを体験させていただいた。一つ目に訪れたカバタでは、実際に湧水を手ですくって飲ませてもらった。両手いっぱいにすくった水はとてもひんやりしていて、暑さで溶けそうだった手のひらが一気に冷たくなった。「いただきます。」一言つぶやいてから、口に水をふくんだ。身体がすーっと冷やされて、ぱーっと甘みが口の中に広がる。これはおいしい。夏の暑さがうそみたいに飛んでいくのが心地よくて何度も飲んでしまった。

最後に案内してもらったカバタでは、そこのカバタで冷やされたきゅうりを食べさせていただいた。あまりきゅうりが好きではなかったけれど、せっかくのもらいものを残すわけにもいかず、塩をかけて思いきりかじりついた。つめたくて、みずみずしくて、とてもおいしかった。他にも、湧水を利用しておとうふを作ったり、お酒をつくって町の中で商いをしているお店もあって、針江では「水」が暮らしを支え、よりよくしていると分かった。

また、ガイドが終わった後、町の大きな川で地域の子どもたちがたくさん遊んでいる姿を見た。その楽しそうな様子に、改めて「こんな暮らし、いいな。」と思ったのだった。

帰宅後、自由研究の内容を模造紙にまとめながらメモや写真を見返した。心にあふれるのは、「また行きたい！」という気持ち。それはきっと、針江という地域で生きる「水」がとても爽やかで美しいものだったからだと思う。針江の人々は、地下から湧く水のことを、「生水」と書いて「しょうず」と呼ぶそうだ。地域の人々と、昔からずっと共に生きてきた湧水に、ぴったりな名前だと思った。いつか私の町にも、生水が溢れたらどんなにいいだろう。文明に頼るばかりではなく、暮らしに自然を取り込み、保全活動で恩返しをする。そんな針江の人々のような生活が、日本中であたりまえになるように、私も自然に寄りそって暮らすべきだと思った。

入選

水の大切さ

和歌山県　開智中学校　一年　篠崎　唯奈

「水の出しっぱはやめなさい」私が、よくお母さんに言われていた言葉です。手を洗う時、歯をみがいている時、お風呂に入っている時などに私はよく水を出しっぱなしにしていました。そんな時お母さんは必ずと言っていいほど、「水の出しっぱはダメ、もっと水を大切にしなさい。」と私を叱ります。私は、「すぐ終わるし別にいいでしょ。」と思っていて、お母さんがそこまで水を大事にする理由が分かりませんでした。しかしある出来事があってから私は考え方が変わりました。

それは夏休みにお母さんとお兄ちゃんと祖父母の家に行っていた時のことです。私が家の近くの景色や生えている植物の写真を撮るために散歩をしていると、近くの畑でおじいさんが作業をしているのが見えました。その日は、畑周りで写真を撮っていたので、畑で作業をしているおじいさんがずっと視界に入っていました。私が写真を撮っている間ずっと作業をしていて、一度も休けいせず、水分もとっていませんでした。私は朝から写真を撮りにきて、おじいさんは私がきた時には、すでに作業をしていたので朝からずっと休けいなしに作業していると思うと心配になり、「休けいしなくても大丈夫なんですか。」とたずねると、「家に水を忘れてしまってな。でも平気だよ、これくらいの暑さなら。」とこたえられ、その時は、深く考えず、平気なんだなと納得しました。

しかし、だいたい一時間ぐらい経って、どんどん暑くなってきて、おじいさんが手で仰いでいたり、頭を軽く抑えていたりしていたので、熱中症にでもなったんじゃないかと思って、急いで家に帰り、冷蔵庫を開けて、中に入っていたペットボトルの水をおじいさんに持って行きました。すると「ありがとう。どんどん暑くなってきて、ちょっとしんどかったんだよ。うん、いつも飲んでる水なのに、いつもの何倍も美味しいよ。」ととても感謝してくれました。さっきは遠くから見ていたので気づかなかったけど、顔は赤く、汗もすごく出ていて、少しだとしても無理をしていたことが分かりました。その日、おじいさんは作業を中断し、家に帰って休んでいました。私も家に帰り、今日あったことをお母さんに話すと「すごいじゃん。おじいさん、すごく感謝してたと思うよ。」とほめてくれました。当時、小学一年生だった私は、お母さんにほめられたことがただただ嬉しくて、心の中でおじいさんに感謝しました。

後日、私がいつものように散歩に出かけていると、あの時のおじいさんが畑で作業をしているのを見つけました。おじいさんも私に気づいたようで「お嬢ちゃん、あの時は、ほんとにありがとね。心の底から感謝しているよ。」と言いながら、畑で採れた野菜や果物を分けてくれました。「この畑は、おばあさんと一緒に大切に育てていた畑でな、そのおばあさんがこの前亡くなっちゃってな、無理をしてでも大切にしたかったんだよ。でも倒れちゃったら元も子もないもんな。いいか、嬢ちゃん、この畑で美味しい野菜や果物が採れるのは、水のおかげだ。こうして作業をしておばあさんの大切なもんを守れてるのは、お嬢ちゃんがくれた水のおかげだ。人を思いやる心と水の大切さ、ああ、それから優しい心、これだけは覚えとけよ。」私は、その時初めてお母さんが水を大事にする理由が分かった気がしました。

その日から私もお母さんやおじいさんのように水を大切にしています。お母さんに水のことで怒られることもなくなりました。今まで深く考えなかっただけで、水はとても大切であり、私達の生活にはかけがえのないものだと分かりました。これから一人でも多くの人に水の大切さを分かってもらうために努力していくつもりです。ちなみにあの時のおじいさんとは今でも祖父母の家に行った時に畑の手伝いをして関わっています。

入選

「天の川のような」

島根県　松江市立湖南中学校　三年　　髙草木　晴香

皆さんは、ホタルを見た事はありますか？私は、小学生の頃に島根県雲南市にある母の実家の前を流れている「山田川」の近くで見たことがあります。数匹飛んでおり、とても小さく幼いながらに見蕩れていたのを今でも覚えています。まだ母が小学生だった頃はもっと沢山いたそうです。

「お母ちゃんが小さい頃はもっと川が綺麗で、ドジョウやボッカやメダカとったり、六月頃になると、川の上をホタルが沢山飛んでいたよ。天の川みたいにずっと光の帯が続いていたんだよ。家の前までホタルが飛んできてね、それを妹と虫とりあみでつかまえてね、虫かごに入れて部屋を暗くして家の中で見てね、外に放していたんだよ。」と懐かしそうに母は言っていました。

そこで私は首を傾げました。私が見た時は数えられる程度しかいなかったのに、何故今と昔でこんなにも違うのだろうか？不思議に思った私はホタルについて少し調べてみました。

調べてみて分かったのですが、どうやらホタルは街灯の届かない静かで綺麗な水辺を好むそうです。その他にも深すぎない川底、餌となるカワニナのいる穏やかな清流などにホタルの住める環境があります。開拓など環境の変化や、水質が悪くなったりして年々ホタルが生息できる環境が減少しており、それに伴いホタルも少なくなっているそうです。

ホタルの住める環境の中で最も重要なのが「綺麗な水」です。ほたるこいという歌にあるように水が苦いとダメ、甘いと良い、水は私達人間の生活だけでなく自然の中でも重大な役割を担っています。

ですが、汚れている水を綺麗にするのは簡単ではありません。そこで私はホタルの住める環境づくりの中でも特に水について調べてみました。調べてみるとホタルが住める環境を個人で作ろうとしている人がいました。その人の言っている内容は、

「子供の頃からある田んぼと用水路が減反政策のあおりで廃止され、毎年いたホタルが少なくなった。子供の為にもこれからもホタルが見れるようにしたい。用水路を作って、ドジョウやカワニナが住む環境を作ってあげたい。」

というものでした。これを見て同じように思っている人がいたんだ、私も少しでもホタルが住めるように自分なりに簡単なことから行動を起こしたいと思いました。

水を綺麗にするのは難しく、時間がかかることは分かっていますが親と話し合いながら少しずつ少しずつ水を綺麗にしていき、そして人生の半分以上が幼虫期、羽化して成虫になっても十日前後で寿命を迎え、産卵した後は二、三日で生涯を終えるという小さく儚いそして幼かった私に「美しい」という感情を教えてくれたホタルへ恩返しをしようと決意しました。

私の今の夢は、大人になった時綺麗になった水と共に母の言うまるで天の川のような沢山の「蛍」を見ることです。

入選

当たり前

岡山県　岡山県立岡山操山中学校　二年　吉田　彩乃

透き通ったきれいな水が流れる川を悠々と泳ぐ魚たち。これは私が祖父の家を訪れたときに見た光景である。私の祖父は絵に描いたような田舎に住んでおり、特に家の傍らを流れる大きな川がお気に入りだった。私が小学一年生の頃、家の中でゴロゴロしていた私と妹を、祖父が川遊びに誘ってくれた。私は今まで川遊びをしたことがなかったため、川に対して少し恐怖心を抱いていた。だが、足の先が水に触れた瞬間、そんな恐怖は一気になくなった。水の中は冷たくて、でも少し足場がヌルヌルしていて、体験したことのない不思議な感覚に私は虜になった。その次の日から毎日川に通い続け、魚やサワガニも捕った。そして最終日、祖父は私にこう言った。「水は限りある資源、無限に出てくるものではないし、すべての水がこの川のようにきれいなわけじゃない。だから、蛇口をひねればきれいな水が出てくるという当たり前に感謝するんだよ」。私はこの言葉を聞いたとき、言っている内容をあまり理解していなかった。蛇口をひねればきれいな水が出てくるのはどこでも同じだと思っていたし、水はなくならないと思っていたからだ。でも、水について調べて水には様々な問題があることを知った。それは、水質汚染や水不足、土砂災害など国内の問題だけでなく世界の問題もあり、今すぐに改善することは難しいものばかりだった。そんな多数の問題の中で私が興味を持ったのは、水不足についてだ。それには祖父の影響があった。

現在水不足に悩まされている人は世界総人口の四割以上である三十六億人もおり、この状況が続けば約三十年後には世界の総人口の半数が水不足に悩まされると考えられている。また、世界の約二十億人が安全に管理されている飲み水が提供されず、サハラ以南のアフリカ諸国では池や川、整備されていない井戸の水を飲んでいる。水くみは子供たちの仕事となっており、毎日三百三十万人もの子供たちが、水の重さに耐えながら家までの道のりを歩き続けている。そのため、子供達には学校に行く時間も体力も残っていない。また、水源にたどり着いたとしても多くの水は泥や細菌などが混ざっているため、浄水処理をしないと子供たちは下痢になってしまう。現状として汚水を原因とする下痢で命を落としてしまった子供たちは年間三十万人に上るという。地球上の資源には限りがあるため、飲み水として利用できる水は全体の〇・〇一パーセントにも満たない。水不足が進んでいけば、動物にも絶滅などの大きな影響を与える。

水不足の現状を知り、自分には何ができるか調べてみることにした。身近な例としては節水がある。具体的にはお風呂や洗面所等で水を流しっぱなしにしないこと、洗顔のときにはためた水を使うことが挙げられる。他にも米の研ぎ汁を水やりに使ったり、ドレッシングなどは拭き取ってから洗ったりするなど多くの解決策があった。

今現在、国や企業などの大きな組織は世界の水問題に対する取り組みを行っている。だが、水を普段から使っている私達にも水問題の責任がある。だから、誰かがやってくれるだろうという考えはやめ、一人ひとりが問題に対して向き合っていくべきだと思う。大きな取り組みでなくても良い。文中で挙げたような小さな取り組みを多くの人が行えば、少しずつ問題は改善されていくだろう。蛇口をひねればきれいな水が出てくるという当たり前を続けていくため、私は自分にできる取り組みを行い、周りの人に水問題について知ってもらえるようにしたいと思う。蛇口から流れる澄んだ水、その向こうに私は祖父の笑顔が見えた気がした。

入選

水不足

香川県　坂出市立東部中学校　二年　山中　恋

今年の六月の終わり、ニュースで香川県が水不足だと知りました。水の不足とは、どういうことだろうと率直に感じました。水道のじゃ口をあけたら水はいつもどおり流れています。節水と呼びかけられているけれど、私はあまり意識したことはありませんでした。一緒にいた母に、どうして水不足なのかたずねてみました。すると、母は平成六年に経験した大渇水について話してくれました。

平成六年、私の姉が生まれた年です。二十八年前の平成六年、四国の水がめと呼ばれる高知県の早明浦ダムの貯水率低下をうけ、給水制限が行われました。それは五時間給水というもので、十六時から二十一時までの、夕方から夜にかけたこの時間以外は、水道からもトイレで水を流しても水は流れない状態だったそうです。そのため、各家庭でも大きなポリタンクを買って水をためました。その水で食器を洗ったり、歯を磨いたりしたそうです。お風呂にためる水も半分に減らして、お風呂の残り湯でトイレを流し、洗濯も行いました。食事を作るためには水が必要なので、食事にも本当に困ったそうです。お皿にラップを巻きつけて使うようにし、食べ終わったらラップを外して捨てるだけにして、食後の洗浄をしなくてもいいようにしました。母は、病院に勤めていましたが、入院している患者さんに提供する食事は紙皿に変更になりました。注射器等の医療器具は、使用後、消毒や滅菌という作業を行いますが、それには水をたくさん使用しなければならないため、注射器はガラス製から一回ずつ使い捨てられるディスポーザブル製品に切り替えられました。私は、水のない生活を想像したこともなく、もちろん、水道から水がでないという経験をしたことがありません。夏休みになると、部活で汗をいっぱいかくので、帰れば好きな時間にシャワーを使うし、朝になればまたシャワーをするし、水を使い放題です。食事やお風呂、トイレなど、水がなければ自分の当たり前の生活が大きく変わってしまいます。

水については、今までも授業や浄水場の見学など、学ぶきっかけがありました。しかし、水も資源で限りがあるものだと分かっていても、自分の意識を変える、行動を変化させることにつなげられなかったことに気づいたのです。水は私の生活の中に常にあり、水のない生活を実際想像すると、何を工夫し、行えばいいのかと考えなければいけません。水の大切さを改めて知ることができました。節水は大切なことだと自分の意識を変えるきっかけになりました。

母と相談し、水の使い方を意識してみようと話しました。具体的には、歯磨きや、シャワーなど水の出しっぱなしをやめる、使い方を変える行動を意識しました。母は、以前そんな大変な経験をしたのに、水のありがたさや制限のある生活の不便さをすっかり忘れてしまっていたと話してくれました。母は、食器を洗うとき、水を出す量や洗剤の使い方を変えています。食器用洗剤を多くスポンジに付けると、流すときにその分水が必要になるので、そこも注意しているようです。できるときに、みんなで工夫することで、日頃から気をつけた生活を送ることができます。水が無くなってから考えるのでは遅いと思いました。庭に育てた花が枯れてしまうのはつらいので、雨水を使うようにしました。考えながら行動すること、家庭で同じ目標を持って行動することは不便とは感じませんでした。水の出しすぎを注意しあうことや、お風呂から洗濯機の水をとる手伝いも楽しく行うことができたのは不思議でした。私の生活だけでなく、水は農業や、飲食店、工場などでも絶対に必要です。米や野菜、花など農産物が枯れたり、調理ができないことでお店を営業できなかったり、私たちの生活にも大きく影響しているでしょう。私はこれからも、節水を継続していきたいと思います。

入選

命をつなぐ水

愛媛県　新居浜市立南中学校　三年　篠原　咲音

先日、我が家はトイレのリフォームをした。丸一日、トイレが使えない…。なかなか大変な一日だった。普段、当たり前に使っているトイレ。これには水が大きく関わっている。

人間にとって、水は飲むだけでなく、衛生を保つことにも必要不可欠なものである。料理をするにも、食器や衣類を洗うにも、水を使う。排泄物を流すトイレ、汗にまみれた体を洗う風呂。全てにおいて、水が必要だ。また近年では、感染症予防のために手を洗うことも重要視されるようになった。衛生を保つための水があることで、私たちは生きていけるのだ。そして特に、私が住む日本では、蛇口をひねるとそのまま飲めるようなきれいな水が当然のようにあり、清潔に生活できる環境が整っている。豊かな森林やインフラの整備、発達した下水処理技術によって、私たちの身近には、きれいな水が常にあるのだ。

しかし、このような環境が、決して当たり前ではないことを知った。水について調べてみると、現在、世界ではおよそ十人に一人が、安全な水を手に入れる水源すら無い状況の中で生活している。都市部から離れた村、都市部のスラム、紛争や自然災害によってインフラが破壊された地域などには、給水サービスも行き届きにくく、水を得るのが難しくなっている。特に、西アジアやアフリカの乾燥地帯や発展途上国の水不足は深刻である。このような地域では、飲み水を確保するために、多くの女性や子供が、仕事や勉強の時間を削って水をくみに行っている。しかし、泉や川の水が、泥や動物のふん尿に汚染されていると、それを飲んだ人々は病気にかかってしまうのだ。また、少ししか水を得ることができず、身体を洗えなかったり排泄物を適切に処理できなくなったりすると、生活環境を清潔に保つことができなくなる。健康にも影響が出る。そうなれば、体が小さく免疫力が低い子どもたちは、常に病気の危険にさらされることになる。アフリカの子どもの約十三人に一人が、五歳になる前に命を落としている。私はこの現状を知り、とてもショックを受けた。そして、常に身近にきれいな水があるということが、どれほど恵まれたことなのかということを、改めて実感した。

世界の水問題を解決するために、私たちにも何かできることは無いか。そう考えてさらに調べてみると、ウォーターエイドという国際ＮＧＯの活動について知った。ウォーターエイドは、「すべての人が、すべての場所で、清潔な水と衛生を当たり前に利用できる世界」というビジョンを掲げて、水・衛生分野に特化した活動をしている。寄付やボランティアなどによって、私たちも支援活動に参加できるようだ。また、二〇一五年に国連サミットで採択された「ＳＤＧｓ」の十七個のゴールのうち、六つ目のゴールは、「安全な水とトイレを世界中に」だ。今まさに、全世界が水問題のための取り組みを始めている。

世界の水問題に大きく貢献した日本の先人がいる。中村哲氏―彼は「砂漠を緑に変えた医師」として、アフガニスタンで用水路の建設に生涯を捧げた人物だ。彼が、次に続く私たちの世代へ残した「一隅を照らす」という言葉には、「自分が今いる場所で、自分にできることをいっしょうけんめいに…」私はこの作文を書く上で、水についていろいろなことを知った。中でも、厳しい世界の現実に、しっかりと目を向けたい。また、今ある環境を当たり前と思わず、感謝の気持ちを持って生きていきたい。そして、水を大切にするための「今、自分にできること」を、実践していきたい。世界の水問題に命を捧げた先人の思いを、今度は私たちがしっかりとつないでいかなければならないのだ。

入選

世界をみて

佐賀県　佐賀大学教育学部付属中学校　3年　田口　夢彩

人は食さずとも一週間は生きていけると言われている。対して水は三日間取らなければ命を奪いかねない、人間にとって大切なものなのである。

私は生まれも育ちも日本で、常に、口をひねればきれいな水が出てくる環境でずっと暮らしている。物心付く前から、水は「あって当たり前」な存在だと思っていたほど、水に不自由したことはなかった。

外国の方が日本に来たとき、水道水を飲めることにすごく驚いたという記事を見つけた。私はその記事を読み、「大袈裟だな」「当たり前じゃん」と思った。いや、思ってしまった。

環境問題や世界のことについて理解できるようになった今、「ＳＤＧｓ」というものを知った。貧困や戦争、地球環境など、解決しなければならない問題の中に、「水」に関する項目があることを知り、恥ずかしくなった。読んだ記事の外国の人は本当に驚いたのだろう。飲む水はおろかトイレの流す水でさえすぐに手に入らない国もある。日本はこれ以上ないほど恵まれているのだ。

日本では片手一つで水を手に入れることができるのに対し、外国ではバケツ一杯分の水を手に入れるために何十キロも歩かなければならない国もあるという。私と同じ年齢、さらには私より幼い子供も、水のために歩いている。自分が何も知らなかったことが分からされた。

今の知識量ではいけないと思った私は、世界のことについて調べてみた。しかし、本やインターネットにある莫大な情報量の中から探しても分からないことが一つあった。それは「水が使えないときの気持ち」だ。ある程度の知識はついたが、それだけでは何の解決にもつながらない。知識が付いて終わり、だと、ただの自己満足に過ぎない。結局何も変わらないまま、苦しむ人が出てきてしまう。私は「水が使えない気持ち」を知るために実験を行うことにした。日本人は一人あたり一日に300リットル以上水を使っている。水に困っている国は一日に14リットルも使えていない。今回私は一日の間、水を14リットルしか使わない生活をしてみることにした。水が使えない気持ちを知ることで自分事として考えられ、危機感をもてると思ったからだ。

地獄だった。あまり褒められた表現ではない言葉を使ってしまうほどきつい一日だった。まず第一に水が飲めない。そして風呂につかれず、シャワーも限られている。トイレも流せない。たった一日だけだから我慢できたが、何日も、何年もこの生活を続けなければいけないとなると耐えられないだろう。水が使えない辛さが少し分かった気がした。

日本は恵まれているため水が使えることは当たり前だと思っている人が多い。しかし、それは当たり前などではなくて、有難いことである。食べることよりも大切で、飲まなければ死んでしまうほどの水が自由に使えないということはとても辛く、危険なことであることが分かった。

全ての人は同じ地球に住んでいる。環境は多少違えども、「地球」の上で生きていることには変わりない。不自由な「気持ち」を知ることが、世界を変える第一歩になると思う。自分の生活が豊かであればあるほど「知ったつもり」になることが多い。そうではなく、気持ちを理解し、「豊かさ」を広げられる人に私はなりたい。

全世界の人が笑って過ごせ、明日を生きれる喜びを味わえるような社会になるよう、今の現状を受けとめ、世界を変えていく。今の自分の気持ちを、大人になっても、おばあちゃんになっても忘れないようにしたい。

入選

「水と生きる」

熊本県　真和中学校　三年　杉本　周優

「冷たっ！」

ある夏のことだった。僕は冷えた野菜を手に取り、思わず声が出た。僕の家の近くには小川がある。そこの水で野菜を冷やしていたのだ。その小川には鏡ケ池という池から出る湧き水が引かれていてとても冷たく、綺麗だ。鏡ケ池は観光地として有名だがその奥には観光客の目につかない小川が続いている。そこではその小川の水を利用した地域の人たちの生活が根付いているのだ。人々はその小川の水を使い野菜を冷やしたり、家の玄関の掃除、植物への水やりなどをしている。そして、僕も冷やした野菜でサラダを作る。小川で冷やした野菜を使ったサラダは普通のサラダよりも一段と色鮮やかに見える。

「おいしい～！」

僕はそう言いながら家族と食卓を囲んだ。そう、この小川の水は僕たちの生活の一部であるのだ。水の使われ方はこれだけではない。子どもの遊び場や地域の人々の交流の場にもなっているのだ。実は野菜を冷やす場所には小屋があり、さらにそこから小川とは別に水が引かれていて、水遊びができる場所がある。小屋では大人たちが冷えるのを待ちながら会話をし、水遊び場では子どもたちがはしゃいで遊ぶ。そこでは子どもから大人まで幅広い年代の人々のふれあいが見受けられる。これが僕の住んでいる地域の交流の在り方だ。

　ある梅雨の時期のことだった。その年は例年よりも雨が多く降り記録的な豪雨となった。僕は不安な日々を過ごし梅雨が明けるのを待った。そしてついに梅雨が明け、小川に行ってみると、思いもよらぬ景色が広がっていた。小川には泥が溜まり、水遊び場も泥だらけになっていた。到底小川の水を使えるような環境ではなく、地域の人たちは驚きの表情だった。しかし小川の水は地域の人たちの生活の一部だ。使えなくなっては困る。そこで僕たちは話し合い、急いで掃除をすることに決めた。小川の泥を取り除き、水遊び場は一度水を抜いて綺麗に掃除した。みんなで役割を分けることで、早く終わった。久しぶりに小川に綺麗な水が戻ってきたのだ。

「疲れた～」

みんなはそう言いつつも、綺麗な水を見れて嬉しそうな顔をしていた。それからはいつもの生活が戻ってきた。皆楽しく会話をし、また野菜を冷やす。

　僕はその出来事から水の身近さを改めて感じた。なぜならこの豪雨をもたらしたのも水だからだ。僕たちは水を普段から有効活用しているが、水害の影響も大きい。津波や土砂災害、川の氾濫など、水は僕たちにとって脅威にもなり得るのだ。さらに最近は地球温暖化によって異常気象も増えている。そのせいで水害の被害が増えるのは避けたい。そのため僕は水を使ってばかりではなく、水をコントロールすることが必要だと考える。なので水害対策について調べてみたところ堤防や放水路などの川の氾濫を防ぐものや、調整池や雨水貯留管などの雨水を一時的に溜めるものがあることが分かった。そこで人々にこの取組みを広く認知してもらい、水と共に生きるという考えを持って生活してほしいと思った。

入選

技術と自然のろ過装置

大分県　大分西中学校　二年　池本　すみれ

コロナ禍で学校が休校になって、ずっと家にいた。私の唯一の楽しみといえば、家の庭で妹と遊ぶことだった。

ある日の朝、ポツ、ポツンという音で目を覚ました。「まさか・・・」そう思ってカーテンを開けると、窓にはたくさんの水滴がついていて、雨が降っていた。隣にいた妹が

「今日は雨だから遊べないね、残念だね。」

と言った。私はどうにかして外で遊べないかと思って、外に出てみた。庭は水たまりだらけで、茶色の水が庭を埋め尽くしていた。「やがてこの水は蒸発したり、地面に吸収されたりしてなくなっていく。そして私たちの飲水になっていく。」と父から聞いたことがある。この茶色の水が、どうやって蛇口から出てくる透明な水になるのだろう。私が水をきれいにするために思いついたことは「ろ過」だ。テレビで汚い水をろ過してきれいにしていたのを思い出したのだ。本当にきれいになるのかは分からなかったが、試してみようと思った。わくわくしてたまらなかったのだ。

ペットボトルの底を切り抜いて、石や砂、葉っぱを入れた。そして、下に透明なコップを用意して、水たまりにたまっていた水を流してみた。

「きれいに・・・なっているか？」

コップにたまった水は、ろ過する前よりはきれいになっていたが、蛇口から出てくる水とは程遠い色だった。

インターネットでろ過の仕組みを調べてみると、活性炭が重要だということが分かった。家中を探すとバーベキュー用の炭があったので、細かくすりつぶして、ろ過装置の中に入れた。茶色の水を流して行く。ゆっくりと水がろ過されていく。最初の一滴がコップに落ちる。二滴、三滴と水がたまっていく。何分かたって、ろ過が終わった。

「あぁ、きれい。」

思わず口に出してしまうほど、茶色かった水は透明になっていた。気づけば、私は水をきれいにすることに夢中になっていた。より透明な水を求めて、たくさん試した。布や細かい石を入れてみたり、順番を変えてみたりした。私が外で何をしているのか不思議に思った妹もやってきて、ずっと水をろ過し続けた。最終的に、私たちが普段飲んでいる水くらい透明になった。だがその水の量はコップ一杯分。きれいな水は貴重なのだと改めて思った。

六年生の夏休み、大分市内の浄水場へ行くイベントがあったので参加した。建物全体が巨大なろ過装置みたいだった。にごった水がだんだんときれいになっていく過程を見るのは、やっぱりわくわくした。私たちがろ過をする際に使用した活性炭が使われている工程もあった。安心して水を飲めるように、たくさんの工夫が施されていた、その技術に私は感動した。「浄水場は水をきれいにする場所」というイメージはあったが、どうやって水をきれいにしているかは知らなかった。普段私たちが飲んでいる水は、浄水場で働いている人たちや水に関わる仕事をしている人たちの努力の結晶なのだ。

ろ過装置は、自然の中にも存在している。その自然のろ過装置とは、「森」だ。森の土に落ちた水は、砂や土・岩でろ過されてどんどんきれいになりながら、地中へと浸み込んでいくそうだ。だが、その自然のろ過装置が危険に脅かされている。森林伐採や気候変動の影響だ。

私たちは、浄水場と自然のろ過装置のおかげで安心して水を飲むことができる。透明な水を守るためには、この二つを守っていかなければならない。そのためには、きれいな水が届くことに感謝して、自分にできることを探すことが大切だ。

まずは自分の近くから、水と繋がっていこう。

入選

ハチドリの水

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　二年　﨑田　莉央

水はとても繊細なものです。水泳部に入部し、一年間水の様子を観察してみて、強くそう感じています。プールサイドにいる私達をゆらゆらと優しく映し出す水、飛び込んだ瞬間私達を包み込む水、全力で泳ぐ私達と融合し、背中を押すように流れ出す水。まるで、水と人間が一体化しているようです。このように水は、行動をありのまま映し出す為、常に様子が変化します。私は部活動を通じて、水の繊細な一面に気づくことができました。

水が変化していく中で反映するのは、良い出来事だけではありません。悪天候や人間の悪い行いも、水はそのまま反映させてしまいます。ある日、いつもどおりプールに行くと、水が茶色に変化していました。この原因は連日の大雨です。また、プールの授業が行われた次の日には、水が黄緑色に変化していました。この原因は日焼け止めです。

このように、ありのままを映し出す水は、周りの環境によって姿を変えることが分かります。水を守ることは、私達が環境を守ることから始まるのではないでしょうか。また、美しい水を守るだけでなく、猛威を振るう姿へと変化した水の対応も大切になります。災害による被害を最小限にする工夫や対策を行い、自然に寄り添うことで、繊細な水との共生へとつながるのです。美しく、傷つきやすい水を守ることは、ご先祖様への感謝、子孫への使命、そして水への敬意でもあります。

二十二億人。これは、家に安全な水が備わっていない人の数です。繊細な水が周りの悪い環境を反映している状況と言えます。しかし、この悪状況を抱える地域は、改善できる技術や資金がありません。そのため思うように環境を変えられず、水が原因での病気や、水が基となる争いが絶えません。

このような問題に対し、積極的に活動している企業が日本には多く存在しています。井戸を掘ったり、水質維持の仕方を教えたり、貯水タンクを造ったり等の支援を、国境を越えて行っています。水の抱える世界共通の問題を通じて、国と国が協力し、一緒に解決しようと努力しています。そこにある姿勢は、共生へ向けた努力を惜しまない姿です。いつか必ず、この努力を水が反映し、輝きを取り戻す日がくるはずです。

また、世界では「世界水フォーラム」という、水に関する会議が三年に一度行われています。これは、議題に対し、企業や団体が共に議論していくものです。近年では、定期的に活動状況を確認、評価し合うなど、実際の行動にも焦点を当てています。

このように、世界では多くの人々が水との共生に向けて奮闘しています。政府、企業、団体が動き出している中で、最終的に大切な事は、私達一人ひとりの行動です。

その一人ひとりの行動の大切さを伝えている「ハチドリのしずく」という物語があります。世界水会議という国際団体のシンボルであるハチドリの元となった物語です。私はこの物語を読んで、地球のために行動するという芯の強さに心を打たれました。

物語は、動物たちの住む森で大きな火事が起こった場面から始まります。この物語の主人公であるハチドリは、火を消そうとして湖から水を運んでいました。この行動を何もしていない動物たちが無駄だと笑いました。その時ハチドリは「私は自分にできることをしているんだよ」と言ったのです。

一人ひとりの行動は小さくて目立たないかもしれません。しかし、みんなの心が一つになり、自分にできる事を継続して行うことで、大きな成果へと繋がるのです。周りに惑わされずに、自然を守るという芯を強く持つことが、繊細な水と共生する近道です。水という繊細な宝石を輝かせて後世に残すために、私は、ハチドリになります。

入選

「この世のすべては水のおかげ」

宮崎県　宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　一年　田邊　彩乃

「この世のすべては水のおかげ」と言いながら熱心に農作業をする祖母の姿を私は見たことがある。祖母は自分の畑で数えきれないほどの花や野菜を栽培している。畑は祖母の家から決して近いわけではないが、ひまさえあれば畑に行き雨水タンクに貯めた水を使って育てている。そのためどの植物も瑞々しく生き生きとしている。水のおかげで植物が育ち、植物がいるおかげで私たち動物がいる。まさにこの世界は水によって成り立っているのだ。

また私の近くには今は亡き曾祖母の家がある。曾祖母は曾祖父が戦死して未亡人になったので、家族七人の生活を支えるため井戸水を利用して、アイスキャンディー屋を営んでいた。そのアイスキャンディーはとても美味しく、飛ぶように売れていたそうだ。祖父母は私に、

「昔は一晩中水を出し続けても井戸が枯れることはなかった。お店があそこまで繁盛したのは水が良かったからだろう。」

と教えてくれた。その水を実際に飲んでみると、それはとてもまろやかで舌ざわりが良く、体全体にみるみる染み渡っていくように感じられた。アイスキャンディーの人気も納得できる味だった。今その井戸水は安全性が認められているため災害時に近隣の住民に開放し飲用水として利用できる「災害時協力井戸」に登録されている。地震などの災害がおきたときに水を通して繋がる命があるのだ。先祖が残してくれた水が人々を救う水になるかもしれない、そう考えると、何だか誇らしい気持ちになった。

祖母が畑仕事に使う雨水や曾祖母が使った井戸水など、私たちの身の周りには豊かな水がたくさんある。今までに水について深く考えることはなかったけれど、私が体験したことを思い返すと、日本は水資源の豊かな国であり、私たちは恵まれた環境の中で生活できているのだと実感できる。

また家に帰れば台所、お風呂、洗面所、トイレなどで安全な水を好きなときに好きなだけ利用することができる。これは、日本は降水量が多く、上下水道の設備はインフラが高度に整備されているからに他ならない。

しかし、ひとたび世界に目を向けると、水不足が深刻な国や地域がたくさんある。また発展途上国では、上下水道がきちんと整備されておらず、安全な水を利用できない場合が多い。なぜ、このように地域によって格差が生じるのだろうか。まず、水資源に関しては降水量の差によるところが大きいだろう。人間の力では降水量を増やすことは難しい。しかし日本は、海水を真水に変える技術をもっている。汚れた水をきれいにする技術をもっている。そのような技術で水資源を増やすことができるのではないだろうか。またインフラに関しても、日本は先進国である。日本の技術が世界の水問題の解決に大いに役立つに違いない。

蛇口をひねれば安心安全な水が出て、それを心ゆくまで飲むことができる日本人は恵まれている。この水の豊かさは日本の風土と先人たちが作り上げたインフラによるところが大きい。今を生きる私たちは、日本の風土と先人たちに感謝し、次の世代に守り受け継いでいかなければならない。同時に世界からみても、恵まれた私たちは、水に恵まれない国や地域に貢献していかなくてはならない。一人一人が日々の生活で水を有効に使用し、無駄遣いをしないように心がける必要がある。そして私自身も「この世のすべては水のおかげ」なのだということを胸に、水に感謝しながら水を大切に使おうと思っている。

入選

水で世界を覗く

中国　青島日本人学校　三年　塩沢　里菜

名古屋の水はおいしい。活性炭、凝集、沈殿、ろ過など、様々な過程を経て水は届けられていると、名古屋の浄水場を見学したときに教わった。微生物を使った方法もあると聞いたときは、本当に驚いた。特に印象に残っているのは、「緩速ろ過」というものだ。急速濾過と緩速ろ過の二つの浄水方法が使われており、緩速ろ過ｖは微生物を使う。微生物でろ過をすると、消費エネルギーが少なく、また、使う薬品を減らせるそうだ。この緩速ろ過ができるのは、水源である木曽川が綺麗だからこそのものである。名古屋の水は「名水」と称され、家には名水の災害用保存水があったりもして、私は長い間名水に親しんできた。名古屋の水は安心安全でおいしくて、水道から直接飲むことも当たり前だった。料理も風呂も歯磨きも洗濯も、すべて水道から出てくる綺麗な水を、何の疑問も抱かず使っていた。

今、私は中国に住んでいる。中国の水は、見た目は名古屋の水と変わりないが、大きな違いがある。飲んではいけないのだ。私の家ではウォーターサーバーを設置して、そこから水を飲んでいる。体で感じないとわからないことがあるというのは本当だ。初めて飲めないと聞いた時は、特に何も感じなかった。驚きはしたが、飲む水は水道からではなくウォーターサーバーの水を、それだけだと思っていた。だが、そうではなかった。口に入る水というのは自分が思っていたより多い。サラダの葉を洗うときは、どちらの水を使えばよいのか。米を研ぐ水も、ウォーターサーバーの水を使わなければならないのか。うがいや歯磨きは、どうすればいいのか。また、水の成分が日本とは違うため、はじめは体に合わなくて皮膚が痒くなったりもした。引っ越してきたばかりの時は、水で相当悩まされた。

中国の水について調べてみると、水道の水が飲めない理由は水源の汚染にあるらしい。中国はとても発展しており、その大きな発展の裏側で、水質汚染があるのだろう。それでも水道からは透明な水が出てくるのだから、水が飲めないからといって決して水の浄水を怠っているわけではない。

今まで住んできた名古屋の安心安全な水は、どれだけ恵まれていたものだったのか気づくことができた。

中国に来て、水はその国の多くを表す、ということを学んだ。先に述べた中国の水道の水が飲めないことは、中国の大きな発展を感じさせてくれた。また、中国で外食をする際に出てくる水は、お湯が多い。冷たい水や冷めているものは体を冷やすとして避けられているからだ。このことから、中国の文化を学ぶことができた。

「水」を通して見える世界に興味を持った私は、ほかの国の水についても調べてみた。

インドの水は、私の想像をはるかに超える世界を覗かせてくれた。インドの一番の問題は、水不足だそうだ。近年の降水量の減少や地下水の過剰採取による地下水位の低下などが原因らしい。最近では中国の人口をも追い抜くと言われているインド。そのインドの水源が、枯渇しつつある。人口はどんどん増え、水源はどんどん枯渇する。この問題はどう解決できるのか、今の私には考えもつかない。

水で世界を覗く。水は国によって大きく形を変え、人間に寄り添っている。私はもっと、水で世界を覗いてみたい。水はまだ、私の知らない面白い文化も、深刻な課題も、隠し持っているのだろう。水は永遠に変化し、時には大昔の出来事を、時には今の状況を表す。そんな水を、私はさらに追いかけよう。さらに世界を、覗いてみよう。

入選

世界中の人々に「透明な水」を

プノンペン日本人学校　中学部　三年　福井　愛莉

あなたは泥や細菌が混ざった水を飲めますか。きっとそんな水、誰も飲みたくないでしょう。しかし、ある地域では汚い水でも、それを飲むしかないという人々がいます。カンボジアもその地域の一つです。カンボジアの地方では、八十五パーセントの人が、感染症などの病気にかかる危険のある水を飲んでいます。

なぜ人々はこの「汚い水」を飲まざるを得ないのでしょう。

最大の理由は「水道水にアクセスできない」ということです。カンボジアの地方で水道水にアクセスするには、初期費用として一家庭約七十ドル必要です。七十ドルくらい用意できるのではないか?と思ってしまいますが、地方の家庭では一日に二ドル（日本円で言うと約二百七十円）すら稼ぐことができません。そう考えると水道水へのアクセスを諦める人が多そうです。しかし、悪質な手段で水道水を手に入れる人もいます。それが「盗水」です。盗水はその名の通り、お金を払わずに水を盗むことです。お金がなく、水道管の不法接続をする人は少なくありません。

私は、以前カンボジアの地方の村を拝見しました。村の人々は一つの井戸を全員で使用していました。話を聞くと、昔は井戸すらなく、きれいな水を手に入れるのはとても大変だったそうです。昔はプノンペンでもきれいな水を手に入れるのが難しかったようです。

その状況を大きく変化させたのが日本の水道技術です。近年カンボジアでは、JICAを中心に水道行政管理能力向上プロジェクトや水道事業人材育成プロジェクトなどが行われていますが、その中でも世界をあっと驚かせたのが、「プノンペンの奇跡」と呼ばれる日本の北九州市などが主導で行った事業です。蛇口から出る水が飲める国は、アジアで日本とシンガポール、そしてプノンペンだけだと言われています。一九九三年に始まったこの水道改革は、戦後間もないカンボジアに大きな影響を与えたのです。

わずか十五年で百万人を超えるほとんどの市民に、安全な水を安定的に、かつ安価で提供するのに成功するまでの道のりはどれほどのものだったのでしょうか。きっかけは一人のカンボジア人、エク・ソンチャン氏です。当時水道局長に任命された彼は、内戦での水道設備の劣化や住民が水道水を使うことができないという状況の中、規律の回復や国際機関からの援助により、改革を進めていきました。そして一九九九年、北九州市はJICA等の依頼により、専門家を派遣し、水道施設の運転、漏水・盗水対策などに携わりました。その結果、給水区域が二十パーセント（一九九三年）から九十パーセント（二〇一二年）に拡大し、無収水率も七十二パーセント（一九九三年）から六・六パーセント（二〇一二年）に削減され、蛇口から飲める水が提供されました。

この「プノンペンの奇跡」おかげでカンボジアでは各地に技術が広がり、地方でも少しずつですが、水道設備が整うようになってきています。

「水」という面でも深く関わりをもつ日本とカンボジア。きれいな水が飲めるのは、影で活躍してくれる人々のおかげだということを忘れてはいけないなと思いました。

私は将来、自然を守る仕事をしたいと思っています。今回さらに安心安全な水を提供する仕事もあると知り、視野が広がった気がします。

世界中では今日も八百人以上が「汚い水」を飲んで命を落としています。いつか世界中の人々に「透明な水」が届く日が来るのを願います。

第４５回全日本中学生水の作文コンクール募集ポスター

第４５回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

1 応 募 要 領　①テ ー マ・・・「水について考える」（題名は自由）
②対　　象・・・中学生（令和５年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と同じ学齢の者を含む）
③原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
④あ て 先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者にあっては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
⑤応募期間・・・令和５年５月31日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて到着分有効
⑥版 権 等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審　　査　応募作品8,779編のうち、各都道府県の地方審査を経た183編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる40編を選出。
令和５年６月30日に開催された中央審査会において、最優秀賞１編、優秀賞10編及び入選29編あわせて40編の入賞作文を決定。

3 表　　彰　（1）賞および賞品

賞		賞　品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞 農林水産大臣賞 経済産業大臣賞 国土交通大臣賞 環境大臣賞 全日本中学校長会会長賞 水の週間実行委員会会長賞 独立行政法人水資源機構理事長賞 シャワーズ賞 中央審査会特別賞	賞状、副賞
入　選		賞状、副賞

（2）表 彰 式　　最優秀賞及び優秀賞の受賞者を令和5年8月1日（火）にイイノホールにて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員（敬称略）
名倉　良雄　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：厚生労働省医薬・生活衛生局水道課長
緒方　和之　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
向野　陽一郎　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域産業基盤整備課長
永井　春信　内閣官房水循環政策本部事務局審議官：国土交通省大臣官房審議官（水管理・国土保全局担当）
大井　道博　内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局水環境課長
佐藤　太　全日本中学校長会編集部長
須磨　佳津江　キャスター
長崎　宏子　スポーツコンサルタント　元オリンピックスイマー
渋谷　正夫　公益社団法人 日本水道協会調査部長
熊谷　和哉　独立行政法人水資源機構理事
橋本　淳司　水ジャーナリスト　武蔵野大学客員教授

5 主 催 者 等　主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第４５回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名		氏　名		氏　名		氏　名		氏　名		氏　名
1	北海道	◎	みずしま そういち 水島　颯一		ほう ゆい 彭　由伊						
2	青森県	○	まつやま ゆう 松山　結宇	○	なるみ あやね 鳴海　綺音	◎	こばやし ちはな 小林　千花		まいさわ ひな 米沢　陽花		こんどう ちか 近藤　千花
3	岩手県		おおむら じゅか 大村　樹花		おさない さら 長内　沙羅		きくち げん 菊池　玄		たけはな のりあき 竹花　紀慧		たこうら さき 田高良　咲希
4	宮城県		えんどう 遠藤　まお		ささき そな 佐々木　奏夏		やえしま 八重嶋　みく	◎	つじい たまき 辻井　珠希		
5	秋田県		あおやま かいと 青山　海翔		さとう いっぺい 佐藤　一平						
6	山形県										
7	福島県		まつもと はるき 松本　晴樹	○	あきやま ほくと 秋山　北透		まつした みさき 松下　心咲		まつもと あやか 松本　彩楓		いとう 伊藤　りん
8	茨城県	○	えんどう るな 遠藤　瑠七		そのだ ももこ 園田　桃子		おおもり かのん 大森　花音		おおたか 大高　ひろの		せき りゅうせい 関　琉惺
9	栃木県		いのせ みちる 猪瀬　美智瑠		しんの はると 新野　遥斗		くりはら いおり 栗原　庵		さかい しおの 坂井　栞乃	○	さとう ひめか 佐藤　姫香
10	群馬県	☆	あんどう しゅうへい 安藤　周平		はやし ゆいか 林　優衣花		うえの みさき 上野　美咲	○	うちだ たかのり 内田　崇法		さかつめ かい 坂爪　開
11	埼玉県		うちやま ふゆな 内山　冬奈	◎	あいば こうた 合葉　鴻太		かじ えな 梶　瑛奈		いしかわ あやの 石川　綾乃		とくなが あかり 徳永　灯
12	千葉県		えびはら しおん 海老原　汐音		よしの ゆめか 吉野　結恵香		おかだ ゆうり 岡田　悠李		きうち れい 木内　れい		いいづか かえで 飯塚　楓
13	東京都		あべ さらさ 阿部　更咲		おおば みはる 大場　美遥		おおかわ まお 大川　真央	○	しもの りお 下野　理央		とねがわ かいと 利根川　快斗
14	神奈川県		はまの ななみ 浜野　七海		おおと あきよ 大戸　晶世	○	うえまつ まいか 植松　舞花		こいずみ りく 小泉　璃空		さわだ ゆうが 澤田　優雅
15	新潟県		うちやま あかり 内山　明香里		しだ あこ 志田　亜呼	○	しんぼ ここな 新保　心菜		まえだ きょうか 前田　恭佑果		まつもと るか 松本　琉花
16	富山県		くるまや ほのか 車谷　穂香		そうまん まほ 惣万　真帆	○	ちかがわ あいこ 近川　藍子				
17	石川県		かさま ひかり 笠間　光梨		こめたに れいら 米谷　玲良						
18	福井県	○	ひろた まりな 広田　真里菜		いしかわ ふうか 石川　楓夏		たけうち たくと 竹内　琢翔		ただ いぶき 多田　衣吹		たかの はやて 髙野　疾颯
19	山梨県										
20	長野県		いまい ゆうな 今井　優奈								
21	岐阜県		くりもと まなか 栗本　愛佳		おだ いこい 小田　憩		おだがき りこ 小田垣　理子	○	きのした こころ 木下　真心		ばば かける 馬場　翔
22	静岡県		こばやし かお 小林　華和	◎	にしがや 西ヶ谷　あかり		あんどう 安藤　よつば	◎	さとう みちひろ 佐藤　迪洋		おくなか みやこ 奥仲　美弥子
23	愛知県	○	むらまつ まなみ 村松　真波		うえむら りこ 上村　莉瑚		ながさか あおい 長坂　青依		よしだ ほのか 吉田　帆花		
24	三重県		やましろ なでしこ 山城　撫子	○	やまなか けんすけ 山中　健資		いわい ゆうか 岩井　優果		よしおか さき 吉岡　紗希		いとう ありさ 伊東　亜里紗
25	滋賀県		かつせ さおり 勝瀬　咲織	◎	ふくおか あまね 福岡　周		のま ここね 野間　心々音				
26	京都府		こだか えま 小高　恵真		ひらの ゆな 平野　優奈		たぐち ひろき 田口　宗暉	○	みつぎ たける 三ツ木　丈琉		
27	大阪府		たなか ことこ 田中　琴子		よこはた まさね 横畠　雅音		まき ちひろ 牧　千紘	○	むらい かれん 村井　楓恋		まつい さら 松井　紗楽
28	兵庫県		あわ ゆうき 粟　悠希		かたおか さほ 片岡　咲萌		やまぐち のりか 山口　倫佳		しぶたに ひおり 渋谷　日桜莉		おがわ かのん 小川　奏音
29	奈良県	○	おちあい ひまり 落合　一葵		やまぐち ともこ 山口　智子		たなか ゆうな 田中　佑奈		つばきもと あいな 椿本　愛奈		あさだ あん 朝田　杏
30	和歌山県	○	しのざき ゆいな 篠崎　唯奈		はやし つくみ 林　津久巳		やまもと えつき 山本　越己				
31	鳥取県		さかぐち ゆいか 坂口　結香		やまもと ありす 山本　杏里珠						
32	島根県	○	たかくさき はるか 高草木　晴香		のつ ひびき 野津　日々輝		のつ いっき 野津　一輝				
33	岡山県		とみや なおふみ 富谷　尚史	○	よしだ あやの 吉田　彩乃		かみべっぷ なお 上別府　奈央		かわばた ゆあ 川端　悠愛		たけはら しおり 竹原　汐梨
34	広島県		ひらいわ かのん 平岩　花乃音		こんどう りな 近藤　莉奈		かめおか 亀岡　はなこ				
35	山口県										
36	徳島県		しばた みさき 柴田　実咲	◎	なかみなみじん 中南　仁		くらはし まゆ 倉橋　麻友		やなぎもと さな 柳本　紗那		たかはし ともあき 高橋　智晃
37	香川県	○	やまなか れん 山中　恋		かわばた ひなた 川畑　日暖		たかくら ひかる 高倉　輝				
38	愛媛県	◎	まつだいら さだひさ 松平　定久		みわ ゆうすけ 三輪　優佑		いしはら ゆうか 石原　優花	○	しのはら さきね 篠原　咲音		むねちか ことわ 宗近　胡音和
39	高知県										
40	福岡県		いがき のぞみ 伊賀崎　望		なかの かな 中野　花菜		たかまつ かりん 高松　佳凛		はしのくち まほ 橋之口　真穂		まきの ふうか 牧野　風香
41	佐賀県	○	たぐち ゆめあ 田口　夢彩		えぐち まいは 江口　舞花		たけした はづき 竹下　八希		おの まなみ 小野　愛美		せりた もとひろ 芹田　幹大
42	長崎県		みきゆうり 美貴　優里		たいら 平　ひより		まつもと 松本　こころ		やました まゆう 山下　真優		しもだ ももか 下田　桃花
43	熊本県		おざき みはる 尾崎　美晴	○	すぎもと しゅうゆ 杉本　周優		きのした わたる 木下　航		みやざき さら 宮崎　紗良		うらかわ きくの 浦川　菊乃
44	大分県		かたい れいな 片井　怜奈	○	いけもと 池本　すみれ						
45	宮崎県	○	さきた りお 﨑田　莉央		やはた みゆ 八幡　泉邑		わたなべ りん 渡邊　凜	○	たなべ あやの 田邊　彩乃		はまた せりな 濱田　芹菜
46	鹿児島県		たにぐち まこと 谷口　諒		べっぷ ゆうり 別府　優里		またえ そうた 俣江　颯太		たかさき りな 髙﨑　莉奈		きはら はると 木原　大翔
47	沖縄県	◎	ひらた なのか 平田　菜乃華		いとまん あいり 糸満　愛莉		たいら しゅうと 平良　柊翔		しもじ じゅな 下地　寿奈		たなか みり 田仲　未莉
48	海外	○	しおざわ りな 塩沢　里奈	○	ふくい あいり 福井　愛莉						

（注）氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第４５回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査優秀者数（編）	応募学校数	応募総数（編）			
				１年	２年	３年
北海道	2	7	132	69	29	34
青森県	5	5	113	12	59	42
岩手県	5	6	55	0	4	51
宮城県	4	7	35	2	7	26
秋田県	2	2	3	0	3	0
山形県	0	0	0	0	0	0
福島県	5	20	675	0	404	271
茨城県	5	9	292	47	209	36
栃木県	5	6	180	0	132	48
群馬県	5	1	252	13	130	109
埼玉県	5	11	304	2	144	158
千葉県	5	5	118	38	39	41
東京都	5	9	416	160	248	8
神奈川県	5	7	125	64	39	22
新潟県	5	6	55	1	12	42
富山県	3	3	336	0	217	119
石川県	2	2	13	0	8	5
福井県	5	1	46	0	28	18
山梨県	0	0	0	0	0	0
長野県	1	1	1	0	0	1
岐阜県	5	4	94	0	33	61
静岡県	5	9	81	13	60	8
愛知県	4	5	6	2	3	1
三重県	5	6	421	227	165	29
滋賀県	3	5	250	135	113	2
京都府	4	6	261	121	77	63
大阪府	5	9	580	323	124	133
兵庫県	5	5	341	133	131	77
奈良県	5	6	240	57	108	75
和歌山県	3	8	553	240	241	72
鳥取県	2	1	2	0	1	1
島根県	3	2	3	0	0	3
岡山県	5	5	9	3	5	1
広島県	3	6	197	0	197	0
山口県	0	0	0	0	0	0
徳島県	5	8	178	31	121	26
香川県	3	15	50	0	26	24
愛媛県	5	7	13	1	3	9
高知県	0	2	3	1	0	2
福岡県	5	6	454	1	169	284
佐賀県	5	18	369	0	174	195
長崎県	5	1	120	50	37	33
熊本県	5	11	964	234	482	248
大分県	2	1	2	0	2	0
宮崎県	5	4	272	117	81	74
鹿児島県	5	3	61	7	25	29
沖縄県	5	10	60	2	38	20
海外	2	7	44	19	13	12
合計	183	278	8,779	2,125	4,141	2,513

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応　募 学校数	応　募 総　数	性別		学年別		
				男	女	１年	２年	３年
		（校）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）	（編）
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
第42回	令和2年度	319	9,444			2,263	4,377	2,801
第43回	令和3年度	351	13,025			3,253	5,816	3,777
第44回	令和4年度	404	9,249			2,279	3,902	3,067
第45回	令和5年度	278	8,779			2,125	4,141	2,513
合　計		19,814	570,594			191,596	209,109	169,503

（注）・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
（教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮）
・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名、第43回179名、第44回1名、第45回1名で、学年別集計から除いている。

第４５回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品8,779編の中から選ばれた最優秀賞１編と優秀賞10編の表彰式及び最優秀作品の朗読は、令和５年８月１日（火）に東京都千代田区のイイノホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。

最優秀作品の朗読の様子は、国土交通省YouTube(MLIT channel）で配信しております。

最優秀作文の朗読
群馬県　群馬大学共同教育学部附属中学校３年　安藤　周平さん
（内閣総理大臣賞受賞者）

瑶子女王殿下、作文コンクール受賞者、各賞授与者、
「水の日」応援大使『シャワーズ』による記念撮影

©2023 Pokémon ©1995-2023 Nintendo/Creatures Inc./GAMEFREAK inc.
ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部
〒100－8918　東京都千代田区霞が関２－１－３
電話　（03）5253－8111（代表）
ホームページ
http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html